

平成27年度
静岡県立大学短期大学部

F D委員会報告

I 平成 27 年度 F D 委員会活動について

1. 平成 27 年度 F D 活動の基本方針および活動実績

従来から行っている継続的な事業を執り行うことと、昨年度着手した F D 事業本来の目的に立ち返るべく、PDCA の手法を視野に入れて昨年度変更した点を中心に F D 活動の全面的なチェックを行い実施に移すことを基本方針とした。

これに従って実施した事業は以下のとおり。

- ・ F D 講演会
- ・ 授業評価アンケート
- ・ 授業参観・授業公開
- ・ F D 新任者研修

以下にその詳細を報告する。

1. 1. F D 講演会

第 1 回短期大学部 F D 講演会 平成 27 年 9 月 11 日（金）13 時 00 分～14 時 30 分

講師：静岡県立大学学長 鬼頭宏氏

演題：人口減少社会の課題と高等教育機関の役割－問われる短期大学の存在意義－

参加者数：教員 26 名、職員 5 名、外部者 5 名

第 2 回短期大学部 F D 講演会 平成 28 年 3 月 4 日（月）13 時 00 分～14 時 30 分

講師：愛知県立大学保険健康センター教授 田中生雅氏

演題：大学生のメンタルヘルスとキャンパスライフ

参加者数：教員 29 名、職員 1 名、外部者 6 名

1. 2. 授業評価アンケート

学生による授業評価アンケートの実施は、平成 20 年度までは自己点検・自己評価委員会が、平成 21 年度の F D 委員会発足後当委員会が行っている。本年度も従来どおり前期及び後期の教員（専任教員と非常勤講師）が、授業終了前 2 週間の授業期間内で、担当科目の授業終了 15 分前に実施した。また、原則として、教員単位で授業アンケートを実施し、集計結果を各教員（専任教員と非常勤講師）に配付した。

1. 3. 授業参観・授業公開

従来の授業公開は、公開する教員が固定してきていること、授業・実習の関係で参加が困難なケースが多いことから、参観を希望する教員が直接または F D 委員を通じて参観したい授業の担当者に申し込む方法に変更した。昨年度は新任者には参観を義務づけることとしたが、今年度は全教員に拡大し、実施は約 3 割であった。

1. 4. F D 新任研修

平成 27 年度 10 月採用の教員 2 名を対象として F D 新任研修を行った。

- ・ 内 容：①授業をするにあたって事前に念頭に置くこと（授業評価アンケートとは）

②授業実施後の自己評価

③授業公開の見学

④FD 講演会への参加

これらは、毎年新規採用者に対して行っているもので、内容は本学 FD 活動の目的や具体的な実施方法を伝えることを中心に行ってきた。当初は教員経験の無い新規採用者を想定していたが、本年度も昨年度と同様、他大学で既に教員経験のある者のみであったので、その概略と他大学との違いなどにも言及した。

2. F D 事業の見直し・追加

授業評価アンケートについて以下について検討し、変更を行った。

- ・教員によるコメント記載方法を変更した。
- ・学生委員会が行う卒業時アンケートに授業評価の項目を追加した。

また、次年度からアンケート項目にシラバスに関わる内容を加えるように申し送りすることを決定した。

3. 「F D 活動報告書」の編集発行・公開

授業アンケートの集計が納入されてから、下記の内容で報告書を作成する。これまでどおり、①紙（冊子）②DVD（CD・R）③WEBの3種の媒体を作成する。

- I 各種事業の実績報告
- II 授業評価に対するフィードバック

4. 委員会開催回数

9 回

5. 総括

FD の概念にはやや曖昧なところもあるが、教育能力を高めるための具体的行動であることへの認識を高め、SD との差別化を図ることも本委員会の職務であり、その具体的なプログラムを策定する大きな責任を担っている。しかしながら、ルーチンワーク化していることは否めない。新たな事業を始める前に従来のプログラムに変更を加えつつ本来の FD 活動の目的に合致させることがまず必要と考えた。そこで、授業参観にピアレビューの手法を取り入れたが、一部の教員から反発の声があった。実施率が約3割にとどまったのも、同様の事情があったのかもしれない。分析と対応策の検討は、来年度への課題とする。

また、平成 29 年度より SD が義務化される。既に事務組織においてはこれに着手しているが、SD に教員が含まれることがきちんと認識されているかは疑わしい。今年度の授業の中には SD に含まれるべきものもあり、今後議論が必要である。

FD 講演会についても参加率が高いとは言えない。日程調整を行ってはいるが、特に9月は実習などがあり、なかなか参加率が伸びないのが現状である。講演内容は、教員の要望に応えるか、「トレンド」を取り入れるかの議論があった。今年度はFDの本旨に従ったもので、かつ要望の多いものの中から選んだが、FD が実効性あるものとするた

めに、なお検討を加えていく必要を痛感する。

授業評価アンケートに関して、毎年教員からのコメントを提出されたものをそのまま公表することにより評価者へのフィードバックとしている。本年度も、事務部の強力なサポートを得て、全教員のコメントを載せることができた。本事業に対する理解と協力とに感謝する。

Ⅱ 学生による授業評価アンケートの実施方法および教員のコメント

1. アンケートの実施および教員にコメントの作成について

1. 1. 授業評価アンケートの実施方法・内容

学生による授業評価アンケートの実施方法・内容は、平成 23 年以降変更していない。
実施方法は次の通りである。

- ①アンケートの実施時期は原則として「最終授業時またはその前週授業時」とした。
- ②アンケート用紙の配布は教員が行う(原則として授業終了 15 分前)。
- ③アンケート用紙の回収は学生が行う。教員が用意した封筒にアンケートを入れ封緘し学生が学生室に提出する。
- ④学生室は質問項目ごとの集計及び自由記述欄のワープロ打ちを外部業者に委託する。
- ⑤業者から納品された④の教員個々のアンケート集計と自由記述をワープロ打ちしたものを封筒に入れ、FD委員会から各教員へ配付し、「教員によるコメント」の執筆を求める。
- ⑥上記①～⑤は、本学専任教員および非常勤講師の担当科目をアンケートの実施対象とする。但し、現段階では非常勤講師の場合は、協力依頼とする。
- ⑦担当科目のうち、アンケート実施時に受講者が 5 名以下の場合は回答者が特定される可能性を回避するため、アンケートは実施しない。
- ⑧オムニバス方式等、複数の専任教員で 1 科目を担当する場合、アンケート用紙はシラバスの科目担当筆頭者に配布する。
- ⑨非常勤教員と専任教員で 1 科目を担当する場合は専任教員がアンケートを実施する。

授業評価アンケート用紙 平成 24 年度のアンケート用紙(次ページに掲載)は、平成 19 年度後期から導入したマークシートを使用した。「Ⅰ授業のあり方」、「Ⅱ教え方」、「Ⅲ総合評価」、「Ⅳあなたの取り組み方」及び教員が自由に質問項目を設定できる「Ⅴ自由項目」の大項目の下に小項目とし 19(各教員が設定することができる自由項目 2 項目を含む。)の質問が提示されている。

学生による評価は、各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの 5 段階によって行なわれる。自由記述欄は、「良いと思ったこと、感心したこと」、「改善してほしいこと、付け加えてほしいこと」、「その他、この授業についての意見、感想等気づいた点があれば書いて下さい」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生の意見、感想、要望等を具体的に述べられる内容となっている。

1. 2. 授業評価アンケート用紙

平成 27 年度のアンケート用紙(26 年度と同じ)は、平成 19 年度後期から導入したマークシートを使用した。「Ⅰ授業のあり方」、「Ⅱ教え方」、「Ⅲ総合評価」、「Ⅳあなたの取り組み方」及び教員が自由に質問項目を設定できる「Ⅴ自由項目」の大項目の下に小項目とし(各教員が設定することができる自由項目を含む。)の質問が提示されている。

使用した授業評価アンケート用紙

授業評価 アンケート

このアンケートは、今後の授業改善の参考資料とすることを目的として、実施いたします。アンケート結果は授業の改善に反映させるものであって、あなたの成績評価に影響を与えるものではありません。集計結果は公表されることがありますが、回答者が特定され不利益をこうむることがないように措置しますので、率直な回答をお願いします。

授業科目

担当教員氏名

学科・専攻

看護学科
①

歯科衛生学科
②

社会福祉学科
社会福祉専攻
③

社会福祉学科
介護福祉専攻
④

履修形態

必修科目
①

選択科目
②

学 年

① 1年
② 2年
③ 3年

評 価

5 そう思う	4 やや そう思う	3 どちらとも 思えない	2 あまりそう 思わない	1 そう 思わない
下記の項目について、該当する番号をマークして下さい。				
Ⅰ 授業の あり方	(1) 授業の目的、目標が明示されていた。			
	(2) 授業は計画的に展開されていた。(授業内容の構成や流れは適切であった。)			
	(3) 授業の目的、目標から見て、授業の難易度は適切であった。			
	(4) 教員から与えられた課題(宿題、レポート)は、質・量ともに適切であった。			
Ⅱ 教え方	(5) 毎回の授業の量や進度は適切であった。			
	(6) 教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた。			
	(7) 教員の授業に対する熱意が感じられた。			
	(8) 教員は、学生の理解が深まるように授業を工夫していた。 (説明の仕方、授業形態、板書、配布資料、視聴覚機器など)			
	(9) 教員は、学生に対して誠実に対応していた。(質問への対応、レポートへのコメントなど)			
	(10) 安全についての指導や配慮が十分なされていた。(実習科目のみ回答)			
Ⅲ 総 合 評 価	(11) この授業の内容は良く理解できた。			
	(12) この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった。			
	(13) 自分は、この授業を受けて、この分野に対する興味、関心が増した。			
Ⅳ あなたの 取り 組み方	(14) 自分は、この授業に遅刻や欠席をしないように努めた。			
	(15) 自分は、この授業を意欲を持って受講した。			
	(16) 自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。			
	(17) 自分は、この授業を理解するために努力した。			
Ⅴ 自 由 項 目	(18)			
	(19)			

授業内容、授業方法などに対する意見を自由に書いて下さい。

・ 良いと思ったこと、感心したこと

・ 改善して欲しいこと、付け加えて欲しいこと

・ その他、この授業についての意見、感想など気づいた点があれば書いて下さい

静岡県立大学短期大学部

ご協力ありがとうございました。

5

学生による評価は、各質問ともに「そう思う」、「ややそう思う」、「どちらとも言えない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」までの5段階によって行なわれる。自由記述欄は、「良いと思ったこと、感心したこと」、「改善してほしいこと、付け加えてほしいこと」、「その他、この授業についての意見、感想等気づいた点があれば書いて下さい」と、アンケート項目だけでは表現しきれない当該授業に対する学生の意見、感想、要望等を具体的に述べられる内容となっている。

1. 3. 教員によるコメント作成方法

教員はアンケート結果を踏まえて、「教員によるコメント」を作成する。「教員によるコメント」は、シラバスの記載との重複を避け、昨年度までとは異なり「授業の目標・工夫など」の一項目とした。

その他の作成方法も含め、実施要領を作成し非常勤を含め全教員に配信した。

1. 4. 公表の目的と方法

上記は「教員によるコメント」として『平成26年度FD委員会報告』に記載し本学web上に公表する。

公表の主要な目的は、教育の根幹である授業が広い公共性を持つこと、およびその費用の大半を県費で賄っていること、この点に起因する公開責任と説明責任からである。本学で今年度行なわれた授業についての学生の評価に対して、教員がどのようにそれを受け止めて改善しようとしているかを報告書として可能な限り公表し、本学に課せられた社会的な責任の一端を果たそうとするものである。

2. 教員によるコメント

以下に、アンケート結果に対する教員によるコメントを載せる。掲載順は以下の通りである。

i) 専任教員

①一般教育等、②歯科衛生学科、③社会福祉学科社会福祉専攻、④社会福祉学科介護福祉専攻、⑤こども学科（学科等、専攻の中は職位順、職位の中は五十音順）

ii) 非常勤講師（五十音順）

学科:一般教育等 職名:教授 氏名:鶴橋俊宏
対象科目:言語と表現(講義)

言語は、人間の精神的・社会的活動の根源である。その言語のさまざまな側面について、主に母語たる日本語を対象として、言語学および修辞学の方法を用いてアプローチをすることで、言語をいかに見るかの基礎を学ぶことを目的とする。具体的には「言語の実体は何か」「ことばの意味とは何か」「ことばの論理性とはどのようなものか」「ことばはどのような構造をもつか」の四つの柱を立て、言語の本質と普遍性とを実際の言語活動に即して説明する。

本年度は、「ことばによる論理とは何か」を中心的なテーマとして授業を行った。

工夫している点は、本学学生の予備知識に合わせて独自にテキストを編み、受講学生とコミュニケーションをとりながら進度を調整しつつ講義を行うことである。受講者の評価は高かったが、受講者の姿勢、クラスの雰囲気にも左右されるので、教員の実力以上に学生の資質によるところが多く、受講者諸君の積極的な授業参加に負うところが大きかったと言えよう。

学科・専攻:一般教育 職名:准教授 氏名:舘山光一
対象科目:統計学入門(歯科衛生学科1年、講義)

今回の評価はかなりいいもので、その理由としては以下の点があげられる。

1. 学生が優秀である。
2. 学生間での学力・理解力のばらつきが少ない。

近年、歯科衛生学科学生の学力は(理解力?)は注目すべきものがある。統計学という分野は、ある程度の学力・理解力が必要で、そのレベルに達しないと授業内容をいくら易しくしても、全体像を理解してもらえない傾向がある。ここ2～3年の歯科衛生学科の受講生は、ほぼ全体として統計学をよく理解できるレベルに達していると思われ、統計学的内容を含む専門科目にも柔軟に対応できることが期待できる。

学科:一般教育等 職名:講師 氏名:有元志保
対象科目:英語(演習)、応用英語(演習)

英語と応用英語はいずれも通年授業であるが、前期の内容を十分把握しないまま後期の授業を担当したため、受講者には様々な不便をかけた。にもかかわらず、どのクラスでも総じて良い雰囲気の中で授業を進めていくことができたと感じている。受講者の理解と協力に感謝したい。

英語では前期のテキストを引き続き使用した。アメリカの歴史や文化について、文章と映像によって学ぶことにより、英語の語彙、文法を習得するとともに、多角的視野を得ることが目的である。授業内容に不明な点が残らないよう、口頭と板書による丁寧な説明を心がけた。多くの学生は文章全文を日本語に訳したノートを作成していたが、訳文に頼りすぎないよう、ペアワークで英文を見ながら意味を確認する時間を設けた。受講者からは概ねわかりやすかったという評価を得られたが、もう少しゆっくり進めてほしいという意見もあった。多様な習熟度の学生に対応するための、さらなる工夫が必要であると感じた。映像視聴では、時間的な制約もあって英語字幕付きのものを使用したため、リスニング力の強化という点ではやや不十分であった。今後は英語の音に集中し、英語を聞くことに慣れるための時間を確保したい。また、テストの時間と問題の分量のバランスについて再検討したい。

応用英語では、受講者の了解を得た上で内容を前期から変更し、短編小説やインターネットのニュースサイトの記事を読むことを中心とした。精読と速読を織り交ぜながら、様々な英文を読むことで、実践的な読解力の養成を目指した。読後には内容について話し合い、自分の意見を言葉で表現し、他者の意見を聞いてさらに自身の考えを深めていくための時間を設けた。アンケートでは概ね高評価であったが、途中で受講をやめる学生や、授業に集中しない学生もいた。少人数授業であったので、受講者一人一人の学力やニーズの把握に一層努める必要があったと反省している。今後はLL 教室の設備をさらに活用し、受講者の授業に対する期待に応える授業づくりに取り組みたい。

学科:一般教育等 職名:講師 氏名:那須恵子

対象科目:食生活と環境(講義)、食生活指導演習Ⅰ・Ⅱ(演習)、栄養学・歯科栄養学(講義)、子どもの食と栄養(演習)、生活支援技術Ⅱ(講義)・生活支援技術Ⅲ(実習)

授業の目標・工夫など

「食生活と環境」:現代の生活環境と関連する食生活上の課題を取りあげ、公衆栄養的視点も取り入れながら、社会全体の健康問題へ関心を持ってもらうことを目的としている。自分の身近なことにしか興味を示さない学生が増加する傾向にあるが、より視野を広くして、様々な課題を理解し、自分の問題として思考していくように、より分かりやすい言葉で説明することを心がけている。

「栄養学・歯科栄養学」、「食生活指導演習Ⅰ」、「食生活指導演習Ⅱ」:

歯科衛生士は患者の全身の健康状態を把握する必要があることから、基礎となる生理・生化学と並んで栄養学を学んでいる。1年次に「栄養学・歯科栄養学」を、2年次には具体的食生活指導を学ぶための「食生活指導演習Ⅰ・Ⅱ」を設置して、系統的にライフステージごとの食生活行動を学ぶことを目標としている。

「小児栄養」:保育士の選択必須科目であり、保育士は保護者からの食事相談の窓口になり、保護者と密接に連携しながら、小児の健康的な食・生活習慣確立を目指すことが、その役割の一つとなる。従って、本授業においては、幼小児期の食生活の基本を栄養的観点も含めて学び、さらに食育の考え方及び実践方法の基礎を学ぶことを目的としている。

「生活支援技術Ⅱ・Ⅲ」:介護福祉士の必須科目であり、介護を必要とする人々のQOLを支える基盤となる一般的食生活だけでなく、高齢者や障害者に対応できる食生活支援技術も身につけるために、栄養の基礎と応用を講義及び実践を通じて学ぶことを目的としている。

授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「食生活と環境」:講義内容については、視聴覚教材(ビデオやパワーポイント)を適宜用いることにより、学生の理解が深まったようであるが、プリント内容にないものをパワーポイントで補うことは学生を混乱させることになったため、パワーポイントの用い方は今後、少し工夫する必要がある。出席確認を兼ねて毎回レポート提出を課した(A4用紙1枚)ため、負担に感じた学生と、一方で学生が考えをまとめることに役立ち講義をより深く理解できたとの意見もあり、今後はレポート提出の趣旨をさらによく説明したい。

「栄養学・歯科栄養学」:教科書に沿った授業を行なった。資格取得に必要な基礎的事項であり、学生に予習あるいは復習を勧めていきたい。「食生活指導演習Ⅰ」:講義をより理解させるため、7回ほど実習を取り入れている。本講義の後の講義担当教員の協力を得て、実習時のみ、時間を延長し、実習内容は事前に配布し、時間内で修了することを目標に実施している。実習ごとのレポート提出を課して成績評価としている。積極的に取り組んでくれる学生がみられた。

「子どもの食と栄養」:講義と実習を組み合わせ、学生の理解を進めており、概ね目標は達成できたものと考えらる。

「生活支援技術Ⅱ・Ⅲ」

講義では高齢者・障害者の背景を考慮した食生活ならびに栄養的特徴を理解させ、実習では調理手順などのイラスト入り教材を作成し、学生の理解を深めるようにしている。学生からは講義、実習とも積極的に学ぼうとする意欲がみられた。

学科・専攻：一般教育等 職名：講師 氏名：野嶋秀子
対象科目：生活の化学

【授業の工夫など】

大学における教養教育は、高等学校までの教育を基礎として行われるが、理科について言えば、高校課程「化学」あるいは「物理」を未履修で本学に入学する者は少なからずいる。そこで「生活の化学」の目標は、「化学をより実践的に行い（実験を行い）、自分の五感をフル活用して観察し、自分で考え、考えを適確に他者に伝えるために工夫して表現すること」である。そのために行った工夫は以下の通りである。①教科書は定めたが、特に必要とする部分は手作りのプリントを与えた。②レポートの様式を学生に与えた。③提出物を丁寧に読み、添削し返却することに力を注いだ。特に、対象事象をよく観察して判断を下すこと、および言語で適切に表現することに、その熟練度が高まるように働き掛けた。④決して事故のない実験を目指し、注意点を与えた。

【授業についての自己評価】

① 履修者数；歯科衛生学科1年31名（78%）、社会福祉専攻1年5名（10%）および介護福祉専攻2年で0名であった。歯科衛生学科では実験室設備および危険回避のために、実験だけはクラスを2つに分けて行った。本学の学生にアンケートをとると、約80%が「数学・物理学・化学は好きではない、不得手である、嫌いである」と答える。社会福祉学科の選択者が少ない理由はここにある。教員に学生が会う以前の問題である。

② 実験について；本学の学生は理論を突き詰めるよりも体を動かして行う実験を好む。また、高校までの段階できちんとした実験をしたことがない学生が大半である。8回の実験を行い、特にその説明に時間をかけ懇切丁寧な実験を心がけた。また、殆ど個人指導でレポートの添削指導を行うことが可能であった。結果、回を追う毎にレポートの記載方法および記載事項が充実したものに变化した。目的・目標をある程度達成できたものと考えている。アンケートの結果より、「化学実験はその理論を理解するために有益である」し、「化学実験のレポートをまとめることは有意義である」けれども、レポートの質・量については不評であったことが明らかになった。

③ 実験に関する自由記述が多くあった。中和滴定と吸光度の測定は面白く役に立つ、マヨネーズ作りおよび石鹼の合成の実験は面白いと評価された。本学の学生には、実験を通して化学の面白さを伝えることが適切な方法であると考えている。

【今後の改善・工夫】

過去は、「化学は面白い」を学生に押しつけてきた、価値観の押しつけをした嫌いがあると気づき反省した。そこで2015年度からは、個々の学生の中にある化学の才能をより増幅させることに留意することにした。具体的には、課題ができたときには「学生とともに喜ぶ」ことにした。このやり方の方が、とても時間を要するのであるが、学生が教員に対して負の感情を抱くことが少ないのではないかと考える。この方向を堅持する所存である。

アンケートにおいて、実験が楽しい、実験のレポートが難しい、等の自由記述が多くみられ、実験が学生にインパクトを与えたことが明確になったので、引き続き実験を多く取り入れる。

【学生に期待すること】

本学の学生は隣にいる学生の真似をしたがる傾向が強いように感じられる。化学を学ぶ

ときには、第一優先は「自分で考えること」にしてほしいと考える。すると必ず「自分で考えるなんて、自信がありません。」と言う。ならば「読書百遍、意自ずから通ず」という言葉を進呈する。

学科・専攻:一般教育等 職名:准教授 氏名:林恵嗣

対象科目:体育実技(実技)、健康科学論(講義)、保育表現技術Ⅰ(身体)(演習)、保育表現技術Ⅱ(身体)(演習)

【体育実技】

授業の目的・目標は、1) 学生が将来的に運動を継続していく意欲を持つようにすること、2) 体力を維持・増進させること、そして、3) 気分転換を図ること、等である。これらの目的・目標を達成するために、施設・設備面や安全面を考慮した上で、学生が希望した運動(スポーツ)を行った。歯科衛生学科と社会福祉専攻においては、全ての項目で学科・専攻平均点を上回っており、介護福祉専攻では学科・専攻平均点を下回ったが、ほぼ4.4点であったことから、良い評価を得られたと考えている。今後も可能な限り学生のニーズに合わせられるように実施していきたい。

【健康科学論】

授業の目的・目標は、1) 健康と運動の関連性についての理解を深めるとともに、安全かつ効果的に健康の維持・増進のために運動を行う方法を理解すること、2) それを理解するために必要な知識(主に生理学的な内容)を学ぶこと、である。歯科衛生学科では全項目で、介護福祉専攻では総合評価以外は学科・専攻平均点を上回っていた。一方、社会福祉専攻ではほぼ全ての項目で学科・専攻平均点を下回っていた。社会福祉専攻では、保育士資格取得に必要なため、理科系の科目が苦手であったり、興味・関心がなかったりしても履修せざるを得ない学生が出てしまう。その結果、評価が下がる傾向になると予想される。しかしながら、社会福祉専攻の各項目の平均点は4.3~4.5点であり、昨年度よりも上回っていることから、昨年度よりは改善できたと考えている。今後も学生の理解が深まるように工夫していきたい。

【保育表現技術Ⅰ(身体)】【保育表現技術Ⅱ(身体)】

これらの授業では、幼児期の身体的な成長に適した運動あそびとはどのようなものかを理解することと、幼児期の身体の成長にはどのような特徴があり、成長の過程で注意が必要な事柄がどのようなものかを理解することを目的・目標とした。保育表現技術Ⅰ(身体)では、ほとんどの項目で学科・専攻平均点を下回ってしまったが、各項目の平均点は4.2~4.5点であり、昨年度とほぼ同程度であった。改善できるところは改善して、より良い授業を実施したい。保育表現技術Ⅱ(身体)は、全ての項目で学科・専攻平均点を上回った。この科目は選択科目であったことから、履修者数が少なかった。少人数教育となったことで、高い評価になったと考えられる。今後も履修者数に合わせて授業内容を調整して実施したい。

2015年度 自己点検自己評価（2016年5月19日作成）

学科：看護学科 職名：教授 氏名：古賀 震

対象科目：1) 医学一般(基礎) (社会福祉学科 社会福祉専攻2年前期) 講義

2) 病態学 (歯科衛生学科 1年後期) 講義

3) 「看護研究」進め方(看護学科 3年前期) 講義

I. 授業の目標・工夫など

1) 医学一般(基礎)

私の担当は人体の解剖・生理学および内科学、特に疾患・病態学と病気の診断、治療、予防等が主であり、それらの分野を中心に身体のしくみ、医学一般を幅広く理解することを目的として、常にわかりやすい授業を行うことに心がけている。

2) 病態学

人体の重要器官の解剖、生理、医化学的機能を理解した上で疾患・病態学について学ぶ事が眼目。種々の基本的かつ重要な疾患及び病的状態とその機序について理解を深められるように授業を行っている。後期に8回の講義を実施し、それらの講義終了後に試験を行うと同時に授業評価アンケートを実施した。

3) 「看護研究」進め方

看護における研究の役割と研究過程を理解し、代表的な研究デザインに関する知識を理解および修得し、さらに関心のあるテーマや看護実践の問題について批判的に吟味し根拠に基づいて解決する能力を修得する事を目的とする。

II. 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

1) 「授業のあり方について」

医学一般(基礎)は3.95点(昨年は各々3.98点)と、昨年と比較して、変わらない評価であった。一昨年は4.34点であった。毎年新しい情報や研究結果以外はほぼ同じ内容の講義であるが、最近の評価が低下傾向にあるようだ。ここ数年は平易で理解しやすい講義を実施しているが、その効果はなかなか見えてきていないようだ。実際学生全般、一般教養、国語、生物学、化学、物理学、数学等の知識・学力がかなり不足していることは最近の最重要課題の一つであるが、年々その傾向が変わりないか又は悪化している印象がある。それら基礎知識の低下が医学一般の講義の理解を困難にしている事も一因と想像される。一般教養を始めこれらの科目の知識・学力をどう補うかについても短期大学部全体で議論する時期に来ている。病態学は今回残念ながら、参加者が規定の人数に達しなかったので授業は実施したが、アンケート調査はできなかった。なお、「看護研究」進め方についてはアンケート結果が当方に届いていなく、担当の教員が報告するのでこれ以後のコメントは控えさせて頂く事にする。学生から授業の時間帯について以前意見を聞いたことがあったが、5限目の授業は特に選択制の場合、学生はその科目の選択を遠慮する傾向にあることは非常に残念なことである。5限目でも選択されるような魅力ある講義が出来るように努力することも重要と自分なりに考えている。

2) 「授業の教え方について」

医学一般(基礎)は4.30点(昨年は3.94点)と、昨年より0.36点アップした。

医学一般では基本的な人体の解剖と生理を理解し、さらに最低限暗記すべきことをきつ

ちりと記憶にとどめるという地道な学習態度が極めて重要と考える。学習すべき内容は非常に膨大であり、毎回のテキストの進む量は少なくとも5-10ページ以上となるために、必要不可欠な事項については板書、プリント、パワーポイント、人体解剖模型等を用いて授業の内容の理解に努めている。しかし結果として講義内容が非常に莫大でかつ範囲も広いために講義時間が不足しているという意見が認められた。また、解剖生理学や病態と治療学関連の写真、図や表などの多くはパワーポイントを使用した。この方法に対して一部の学生の反応は非常に好評であった。さらに自らの臨床経験や事例、トピックスを数多く紹介して、その分野の重要性を強調して興味を持って学習できるように毎回努力している。

3)「総合評価について」

医学一般(基礎)は4.30点と昨年の4.00点から予想以上にアップした。今後も変わらずレベルを維持できるように努力、工夫しなければならない。

4)「あなたの取り組み方について」

医学一般(基礎)は4.38点(昨年3.90点)と、この項目の学生の自己評価は昨年よりかなり上昇した。講義の際に学生に毎回わからない点について質問するように促しているが、実際に質問する学生が少ないのは残念な事である。質問しやすい環境づくりが必要と思われる。またこの点は学生の今後さらなる一層の自己改革、自己努力に期待したい。さらに今後も引き続き学生が講義に対して積極的に取り組む様にさせる何らかの工夫が必要と考える。

III. 授業改善の展望

8年前から小テストやパワーポイント、DVDの導入など多くの点で授業・講義の改革を行って来たが、医学一般では残念ながら昨年度・一昨年度と比較して評価が全体的に変わりがなかったかやや上昇傾向が認められた。これまでの改革が成功の方向へ進んでいると思っていたが、年度によってダウンしたりアップしたりで、思っていたほど成功していない。来年度は改善してさらに良い評価が得られるように努力したい。また、就職したクリニックや病院また施設、会社、企業、即ち地域社会から本当に喜ばれる、優秀かつ患者さんに優しい思いやりのある学生を養成して行かなければならない。私はいつも限られた時間内にいかに多くの知識を学生に対してわかりやすくかつ楽しく理解、記憶させる方法を模索しつつの授業を実践してきたつもりである。そのために小テストの実施をはじめ、板書、授業補強のプリント、パワーポイント、ビデオ/DVD等をフルに活用し、同時に学生に直接質問して考えさせる授業を積極的に実施し、さらに学生には日常生活の中で医学・医療に興味を持って学習するために、毎日、新聞やテレビ、ラジオ、インターネット、図書館等を積極的に活用するよう力説している。しかし、実際にはそれを実行する事は非常に難しいようであるが、今後さらに学生の努力に期待している。我々は学生が自ら興味を持って行動、学習できるように、十分に工夫して可能な限りインパクトのある、わかりやすい講義・演習を行えるように今後も継続して全力を尽くしたい。

学科:看護学科 職名:准教授 氏名:長澤利枝
対象科目:看護研究(講義・演習)、こころの障害(講義・演習)

I 授業の目標・工夫など

「看護研究」では、全15回中、文献クリティークに関する講義を1コマ、文献検討と検索に関する講義を4コマ、文献クリティーク発表会を1コマ担当した。担当したコマにおいては、「具体的なイメージを持って学習を深める」ことを重視した。①講義:実際の論文を取り上げて、クリティークのポイントをその論文にあてはめながら解説した。②演習:医学中央雑誌(医中誌)Web版を用いて、業者による具体的な検索方法等の説明をしてもらった。その際実際に検索する場面において、臨地実習全体の最後に行う発展看護実習時、見学実習を行う医療施設に入院されている方に多い疾患(ハンセン病、がん等)をキーワードとして検索してもらう等、今後の実習にも活かせるような内容を依頼しておいた。③発表会:内容に関する質問・良い点・今後の課題等について、できるだけ具体的に伝えるように努めた。

社会福祉学科介護福祉専攻の学生達を対象とした「こころの障害」では、昨年度と同様に、医療職ではなく介護職を目指す学生達に対して、精神医学及び精神障害者に対する援助に関する知識の基礎をできるだけわかり易く理解してもらうことを目指した。学生達の関心を高めるためにビデオ等の視聴覚媒体を用いたり、資料の中に適宜介護福祉士国家試験問題を取り入れたり、精神障害者への対応等の説明時に、介護職の現場に活用できそうな視点や援助方法等を、具体的に提示する等の工夫をした。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「看護研究」では、講義に対しては「実際の論文を用いて解説してもらえたので、どんなところに着目してクリティークしたらよいか、具体的にわかって良かった。」等の記載が見られた。その一方で、発表会に対しては(学生数が100余名と多かったため)発表における1グループの所用時間が短いことから、「他グループの発表内容については、十分理解できなかった。」等の記載も見られた。対象学生数が多い場合、限られた授業時間数の中で、効果的な発表を行うための工夫については、学部授業を行うことになった際にも、継続して検討していきたい。

「こころの障害」においては、「教科書・プリント両方を使い授業をすることで、理解を深めることができた。」「プリントで国家試験の対策をしてもらえたので、ためになった。」等の記載が見られた。その反面、教員側の出席の付け方(2コマ続きの授業の感想を1枚の出席表の上段と下段に分けて記載するところを、教員に確認せず2人で半分ずつに切り分けて使用してしまい、結局1コマ目の授業感想しか記入・提出しなかったため2コマ目を早退扱いとした件)に対して、自分達が教員の説明を十分に聞いていなかったことを反省する以上に、納得いかないと不満を記載した学生や、就職説明会参加のため授業を欠席したことに対して、考慮はするが欠席となることを伝えたこと(看護学科においては同ケースの場合欠席となる)に対しての不満を記載した学生もいた。不満があるのなら、なぜ直接教員のところへ速やかに訴えに来ないのか、教員に確認する前になぜ自己判断で出席表を勝手な使い方をしたのか等々、最近の学生達のコミュニケーション問題の一端を垣間見た思いがした。コミュニケーションの重要性については、今後も機会あるごとに学生達に伝え、注意喚起していきたい。社会福祉学科介護福祉専攻の授業担当は今年度をもって終了となったが、教員としても色々と学び多い貴重な機会となった。

学科: 歯科衛生学科 職名: 教授 氏名: 有泉祐吾

対象科目: 病理学(講義)、歯科材料学(講義)、口腔病理学(講義)、歯科保存学(講義)、
臨床歯科医学特論(講義)、救急処置法(講義・演習)、歯科材料学実習(実習)

I 授業の目標・工夫など

担当科目のすべてが歯科衛生士教育における専門科目であるので、講義科目においては、それぞれの科目での最低限の知識を修得させることを、また、実習科目においては講義科目における基礎的知識を実習により確認させることによって、理解度の深化を目指すことを目標とした。なおその際に、歯科衛生士が医療従事者の一員であることを認識させるよう図ったことも、例年通りである。

そのため今年度も、講義科目においては講義の要点をプリントとして、それに穴埋め形式で記載していく方式を、主として採用した。また、講義においても、近年とみに増加している『実際に、手に取ってみなくては、あるいはやってみなければ解らない。』という要望にできる限り応えるために、実物の提示を図り、スライド等では判断が難しい器具、機器等の実際や医薬品の形状、臭気などを体験させることを、今年度も積極的に行った。さらに、今年度も一部の教科においては動画による提示も行い、理解度の深化を図ったことは同一である。また、実習にあたっては、機器や材料の進歩発達に合わせ、時流に沿った実習となるよう検討し、今年度も必要十分数を上回る教員で担当し、目の行き届いた実習となるよう心掛けた。

一方、今年度も授業の終了前に当日に行った講義内容の確認のための小テストや実習においては宿題として実習における理解内容の自己評価と、疑問点あるいは感想等の記載を行ってもらった。これは、その授業、実習での学生自身の理解度の深化と、また私自身のその授業、実習での学生理解度確認の指標の一つと考えて行っている。また、例年のことではあるが、内容等の疑問点を授業、実習時間内に適時、また終了時にも聞いているのだが、なかなか質問が出ないための対応でもある。そして、これにより確認された理解不十分な点や質問等は出来得る限り、次の講義あるいは実習時に回答や解説、追加資料の配布を行い、理解が確実となるよう配慮したことも、例年の通りである。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

今年度の評価結果を見ると、概ね科目間での評価に大きな差異はなかったが、若干学年間での評価に違いがみられた。また、授業内容の理解度において、ごく一部の学生ではあるが、不十分ではないかと窺われる結果となった。この授業評価アンケートをさらに有効活用するためには、学生個々のアンケート項目間の関係提示を、各教員に対して行うことも必要なのではないかと昨年度も記載したが、その思いをさらに強くしている。

一方、今年度も3年生になり学外実習を行うようになると、学内での講義科目の授業内容の理解度が非常に上がったとの感想を受けたが、これも例年のことであり、前述の実際に体験してみないと解らないとの感想に通じるものと考えられた。そのため、今年度もさらに積極的に動画を用いる試みを行ったのだが、残念ながら効果としては概ね想定通りであり、意図した以上にはあがらなかった。そこでさらに、講義や実習時には今まで以上に具体的な臨地・臨床との関連を説明するよう企図したので、今後、この効果の確認を行っていききたい。

学科: 歯科衛生学科 職名: 教授 氏名: 吉田直樹

対象科目: 生化学 (講義)、口腔生理学 (演習)、口腔衛生学Ⅰ (演習)、
口腔微生物学 (講義)、口腔衛生学Ⅱ (演習)、微生物学 (講義)、
歯周治療学 (講義)、歯科衛生統計学 (講義)

I 授業の目標・工夫など

本学歯科衛生学科は、歯科衛生士養成機関という性質を有している。学生は卒業時に「短期大学士」の学位とともに「歯科衛生士国家試験受験資格」を取得する。

自分の担当科目は国家試験の内容にも直結していることから、必然的に、授業は国家試験を意識したものとなる。「授業において、全ての学生が国家試験に合格するために必要な知識を確実に伝え、十分に理解させる」ことを一つの大きな目標としている。そのためには、教科書に記載されている内容に関して、要点を簡潔に伝えることを心がけている。

講義においては、単に教科書に記載されている知識を与え、学生は、それを得るということに留まらないようにと考えている。いわゆる詰め込み教育となってしまうのは、学生が「自主的に学ぶ」という機会を奪ってしまうことになり、一部の学生が、「受け身」の姿勢で学ぶことから抜け出せなくなってしまう恐れがある。学生は卒業後、学問を続けて行くこととなり、在学している時間よりも卒後の時間の方がはるかに長い。したがって、学生ひとりひとりが、短期大学において「学問をした」という実感を卒業後も永く持ち続けられるような内容の授業を行いたいと考えている。日常の授業において、学生ひとりひとりが「自分は学問の場に身をおいている」という実感を持てるようにすることを心がけている。学生自身が「学問」をしているということを感じられること。つまり、それぞれの科目が、学問としての体系を有していること、先人達の研究によるエビデンスの蓄積が教科書に記載されているということ、そして、それは現時点のものであって、将来的には変化して行く可能性があるものであることを理解させるように努めている。

授業を理解しやすくする工夫としては、PowerPoint や動画の活用、重要な項目の板書を行っている。一方通行になりがちである講義の中で、ポイントとなる部分では、時々、学生に対して直接質問をするようにしている。

また、90 分の講義時間を前半と後半に分け、途中で質問を受ける時間を設けるようにしている。そのことにより、学生の集中力が 90 分 x1 では無く、45 分 x2 に変更され、より高い集中力で講義に臨めるようにという工夫のつもりである。

学生に配布している紙ベースのレジュメに関しては、重要語句の部分などを空白にして、学生が書き込んで完成する様式を用いることにより、やはり学生の集中力が維持されるように工夫している。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

学生による授業評価アンケートの結果に関しては、概ね良好であったと考えている。その中で、「歯科衛生統計学」だけが、他の科目と比べて評価が少し低いと感じた。どの科目も基本的な授業の行い方は共通であるのだが、「手書き」の分量が多く、その文字がきれいでないということは、避けなければいけないようだ。

Ⅲ 学生に期待すること

学生に対して、教員が内容をまとめるのではなく、学生自身で、「講義の内容をうまくまとめ、自分なりにノートすること。」は、最初は高い要求とを感じるかも知れない。そこで、レジュメに関しては、重要語句などを空白にしておき、学生が書き込んで完成する様式を多く用いているのであるが、このような形態の講義に慣れてしまった学生は卒業後、はたして、自ら考えることができる人になれるのか、不安を感じる。やはり、自分自身で能動的にノートをとることを学んでほしいと希望する。

学生が入学した時に、「これからは大学生なので、高校生までとは大きく変わります。自ら学ぶことが中心になります。」と話している。しかしながら、「知識の詰め込み」といった部分が、かなり多くなってしまっているのが事実である。

できるだけ、学生には、難解なものに挑戦させて、自らの力で理解して行こうと努力する時間を十分に与えたい。学生が「自ら考えることによってやっと理解できた。」という喜びを得られる機会を多く持てるようにしたい。

ところで、学生にとって理解しやすい授業を行うという方向に多くの教員が向かうことに関して、良い点だけだとは考えにくい。学生にとって「わかりやすい」授業は良い授業であるのかも知れない。しかしながら、「わかりにくい」ということを、教える側の教員が悪いということにしまい、「わからない」ということを自身で解決しようとししない風潮が生じることは、問題ではなからうか。全ての授業が、理解しやすい授業ばかりになってしまうことは、本当に望ましい状況と言えるのだろうか。

わかりにくく表現されたものを、何とか理解しようと学生が努力することは重要な知的活動となると思う。実は、社会人になってからは、そのような能力は無くてもならないものだと思う。

わかりにくいものほど、面白い。挑戦してみたい。という気持ちを持ち続けてほしいと思う。

学科・専攻：歯科衛生学科 職名：准教授 氏名：木林美由紀

対象科目：学校歯科保健論(講義・演習)、学校歯科保健実習(実習)、マネジメント論(講義・演習)

授業の目標・工夫など

学校歯科保健は、生涯にわたり口腔の健康を保持増進するために必要な継続的な口腔保健管理の中に位置付けられている。学校歯科保健論では、子どもの社会的環境、全身の成長及び口腔状態を把握し、心身ともに健康を支援する意義や目的、方法を習得するため、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を展開している。事前学習を課し、グループで課題に取り組み、意見をまとめる力や集約するスキルを養い、プレゼンテーション力の習得及び強化に努めた。学校歯科保健実習は、学校歯科保健論で習得した知識を活かし、歯科保健の知識や技術を身に付けるのに適した園児や児童に対し、積極的に健康の保持増進ができるように、学生による歯科保健指導計画の立案、シナリオ・媒体作成の取り組み、歯科保健指導を実施する学外臨地実習の準備をした。マネジメント論は、歯科保健医療者として、職業集団や他業種者らと良好な人間関係を構築・維持し良質な医療ケアを提供するために、各人が持ち合わせる資質及び機能を駆使し、組織の成長と発展に繋がるマネジメント能力を修得することを目的に講義を行った。トレーニングツールなどを活用しより身近で具体的な実践例を数多く示すよう努めた。

授業についての今後の改善・工夫及び学生へ期待する事と要望

学校歯科保健論と学校歯科保健実習は連携した科目であり、3年次の臨地実習を前倒しして、教育施設の見学実習を学校歯科保健実習の枠内で実施し、指導実習を2年次終了時の春休みに実施する。そのため、学校歯科保健実習の講義数はタイトになるが、1講座の時間を調整し定められた講義時間数以上の実習時間を確保している。また、これらの事情は前期の授業時に詳しく重ねて説明しているので、学生も自ら計画を立てて授業に臨むことを強く希望する。学生が立案する指導内容に関しては、児童の発育段階を踏まえ、教育現場でのルールを尊重し、細心の配慮を払って取り組まなければならないことを学んで貰いたい。さらに、現場が求める要望を理解し、柔軟な姿勢で対応するスキルを習得してほしい。また、指導担当学年・クラスの配分は、学生への事前調査を行い、全て希望通りに配分したので、各人がチームの一員としての自覚を持ち、真摯に真面目に取り組むことを強く希望する。学校歯科保健実習では、地元放送局や新聞社が幼稚園・小学校での実習の様子を取材し、報道番組で放映されたり紙面に写真入りで掲載されたりしたことは、学生や実習現場の貴重な経験となり、地域貢献と県立大学の社会貢献、地域活動のアピール、加えて歯科衛生士の社会的認知度向上に貢献したと考える。授業毎の振り返りシートを用いて、質問に対応し授業内で解決できなかった事柄を丁寧にフォローし、授業における要望や意見も汲み取り、必要に応じ改善に努めている。最終講では、授業内容の復習・要点を過去の国家試験問題と関連させた設問集を配布し、国家試験を身近に感じ早期取り組みへの一助とすべく工夫を図った。今後も設問内容を充実させ継続する計画であるので、活用を期待する。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 准教授 氏名: 鈴木温子

対象科目: ①高齢者歯科学(講義), ②歯科衛生士業務記録法(講義)

③障害者歯科保健介護論(講義), ④障害者歯科保健介護実習(実習)

I 授業の目標・ねらい

＜講義科目①～③共通のねらい＞

- ・高齢者のもつ身体的、精神的および社会的特性を理解する
- ・障害高齢者の歯科疾患や口腔機能低下を理解する
- ・食べる機能のメカニズムと全身との関係を理解する
- ・介護予防事業と口腔機能向上プログラムを理解する
- ・POSに基づく業務記録記載の意義と必要性を理解する

＜実習科目④ねらい＞

- ・障害高齢者の心身の状態を把握ための介護導入法の基本を実践できる
- ・見守りから全介助まで障害の程度による口腔介護法の基本を実践できる
- ・口腔機能を向上させるための口腔リハビリテーション法の基本を実践できる
- ・摂食・嚥下機能を活性化するためのリハビリテーション法の基本を実践できる
- ・義歯の取り扱いについての介護法の基本を実践できる

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

＊「Ⅰ授業のあり方(4項目)」、「Ⅱ教え方(6項目)」、「Ⅲ総合評価(3項目)」の平均点数は、それぞれ①高齢者歯科学は 4.66, 4.62, 4.48, ②歯科衛生士業務記録法は 4.60, 4.62, 4.52, ③障害者歯科保健介護論は 4.60, 4.47, 4.54, ④障害者歯科保健介護実習は 4.67, 4.73, 4.64, であった。

＊例年と比べて自由記述を沢山書いてもらい喜ばしいことであったが、今回も「スライドが見にくい」等の意見が多々あり、次年度に向けて早速プロジェクターを新機種に更新するなどして改善を図った。自由記述で意見が沢山出ていた割に、学科平均点と比較するとほぼすべての質問項目について4科目共に評価点が上回っていた。昨年の評価をふまえて更に授業を工夫したことが評価につながったと思われる。

＊自由記述欄については、「一般常識も知ることができて為になった」「業務の流れや詳しい法律について理解できてよかった」「熱意を持って説明してくれてよかった」「大事なことを強調してくれるのでポイントが把握しやすくてよかった」「先生の実体験も含めてわかりやすくデモンストレーションしてくれて興味が沸いた」といった嬉しい評価をもらい、今後授業を進める上で大いに励みとなった。反面、前述したように「スライドの字が小さすぎてよくわからなかった」「配布資料をもっと少なくしてほしい」といった指摘も昨年に引き続きあり、よかれと思って工夫を凝らしてはいても、すべての学生に真に満足してもらえる授業のあり方の難しさを改めて痛感した。

III 授業評価について学生への期待

例年同様、今回も学生の点数評価や自由記述をじっくり読み込み分析することで学生の言わんとしていることが今更ながらにストレートに伝わって来る。時々学生達から「こんな評価しても自分達には反映されないから」というもったもな呟きが聞こえてくるが、現行の学生達への還元を考えるならば、授業の度に忌憚のない意見を聞かせてもらいたいということだ。口頭でも無

記名で書かせてもなかなか教員への要望が出てこないのが実情で非常に残念なことである。今後はこの教員評価システムの目的についてももう少し学生にきちんとした説明が必要のようにも思われる。その上で、このシステムが形骸化することなく今後も続けられて行くことを毎年期待している。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 准教授 氏名: 野口有紀

対象科目: 歯科衛生学総論(講義)、地域歯科保健論(講義)、地域歯科保健実習(演習)

I 授業の工夫など

専門分野における知識・技術・態度を取得し、授業の役割の明確化する運営を目標とした。基礎と専門科目、座学と演習・実習などの多方面の授業内容の連携をはかり、実践する能力を修得する組み立てとした。

- ・ 動機付けの工夫として、現場の情報・体験情報・最新の調査結果を取り入れた理論と実際のマッチングを意識した授業運営を行った。
- ・ 概念理解の形成を助ける工夫として、図・写真・グラフなどを活用した教材を使用した。
- ・ 学習意欲を高める工夫として、理解度・反応がわかるよう講義終了ごとに小テストを行った。小テストは国家試験に準じた形式で行った。
- ・ 授業参加を促す工夫として、授業中の理解度を成績評価に反映させた。
- ・ 情報技術活用の理解と工夫として、視覚教材を用い、書き込みをかねた資料として配布した。
- ・ 問題発見・解決能力を高める工夫として、ケース・メソッド、社会と連携した最新の情報・調査結果を取り入れた授業の実施に努めた。
- ・ 理解度に合わせた指導の工夫として、質問事項を用紙に記載し提出し、対処した。
- ・ 成績評価の工夫として、筆記試験に偏向しない多元的成績評価をした。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の授業アンケート集計結果の「I 授業のあり方」「II 考え方」「III 総合評価」平均点は概ね 4.60 以上で、学科・専攻の平均点より全項目が良好であった。学生主体授業の取り組みなどにより、興味・関心を持ち、理解が深まったと思われる。平成 28 年度も同様の手法を用い授業展開を図っていく。

さらに、学習意欲を高め、理解力が深まるよう下記について改善・工夫に努めたい。今後の改善点として、「疑問点を必要に応じて教員に質問した」の項目の平均点が、他の項目に比べ低い傾向であった。学生全員が質問できる環境づくりとして、授業ごとに質問事項を用紙に記載提出をする時間が十分とることが出来なかった。平成 28 年度は記載提出する十分な時間を授業内に設けるなど改善していきたい。

今後も、学習意欲を刺激し、分かりやすい授業運営が出来るよう努めたい。

III 学生に期待すること・学生への要望等

予習・復習の課題設定を含め、授業内容をよりよく理解し実践に役立てることができるようにして欲しい。

学科: 歯科衛生学科 職名: 講師 氏名: 海老名和子

対象科目: 歯周疾患予防処置論(講義)、歯周疾患予防処置実習Ⅰ(実習)、歯周疾患予防処置実習Ⅱ(実習)

I 授業の工夫点

「歯周疾患予防処置論」は、講義科目ではあるが歯周疾患予防処置実習が効果的に行えるように、超音波スケーラーや歯面研磨などの体験実習や鎌型スケーラーの基礎的操作も授業に取り入れている。これにより、2年次の「歯周疾患予防処置実習Ⅰ」のマネキン実習にスムーズに繋がっている。

「歯周疾患予防処置実習Ⅰ」、「歯周疾患予防処置実習Ⅱ」では、マネキン実習と相互実習で、授業時間を変則的に変えている。これにより、効率の良い授業になっていると考える。実習は、常に歯科衛生士教員 6 名体制で行い、示説、机間巡視して個別指導を行う等、充実した教育体制となっている。実習前には参加教員で打合せを行い、実習内容や示説内容を確認し、教員の意思統一を図るようにしている。また実習科目については、筆記試験だけでなく実技試験を実施し、学生の技術レベルの向上を図っている。

平成 27 年度の「歯周疾患予防処置実習Ⅱ」では、歯科医院のメンテナンス時に行われている超音波スケーラー操作の相互実習を新たに加え、3 年次の臨床実習において困らないようにした。今後も、臨床で良く行われる処置や操作については、状況に応じて取り入れていく予定である。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

今年度の授業評価は、「授業のあり方」が 3 科目平均 4.62(4.74,4.59,4.52)、「教え方」が 3 科目平均 4.58(4.78,4.52,4.44)、「総合評価」が 3 科目平均 4.62(4.81,4.50,4.54)という結果で、かなり高評価であった。

過去 8 年間(2008-2015)の平均と比較しても、大項目は全て、ほとんどの小項目が 8 年間の平均以上であり、かなりの高評価であった。特に大きく変更した点はないが、前年度の反省点を踏まえ、授業内容を多少変更するようにしている。

また平成 26 年度は、「歯周疾患予防処置論」の「教え方」の「学生の理解度に配慮して授業を進めていた」が 3.98 であったが、27 年度は、4.74 と高ポイントであった。授業進度や授業内容については、特に変更した点はないが、授業途中や終了時に授業内容のポイントを、学生に伝えるようにした。このことにより、昨年度よりも学生の理解が深まったためではないかと考える。

また、今までは授業時間の中で質問を受けるようにしていたが、28 年度からは授業終了後にも、質問がある場合には、質問するように伝えている。

2 年次の実習科目については、細心の注意を払うように心掛け、今後も安全に配慮した授業を行うようにしていきたい。また、学生の意見は真摯に受け止め、学生の知識、技術の習得に努めていきたい。

学科・専攻: 歯科衛生学科 職名: 講師 氏名: 中野恵美子

対象科目: 歯科診療補助論(講義)、歯科受療支援論(講義)、歯科診療補助・支援実習Ⅰ(実習)、
障害者歯科学(講義)、口腔介護予防・リハビリテーション法(講義・演習)

「歯科診療補助論(1年後期)」「歯科受療支援論(1年後期)」「歯科診療補助・支援実習Ⅰ(2年前期)」「口腔介護予防・リハビリテーション法(3年前期)」は、歯科衛生学教育カリキュラムのうち、専門分野の「歯科診療補助論」に属する科目である。1年次に基礎知識を学び、2年次に実習を通して主に臨床における患者支援に必要な実技と歯科医療安全管理を習得するとともに、1～3年次の科目を通し、地域において歯科衛生士がクライアントのQOLの向上にどのように貢献することが期待されているのか、その背景およびクライアントや他職種との役割分担、連携について理解することを目標とした。

「障害者歯科学(2年後期)」では、障害者と障害者歯科についての理解を深め、歯科衛生士に求められる歯科的支援を行うための基礎的知識を身につけることを目標とした。

継続課題である能動的な学習姿勢の構築のため、講義科目は初回到グループワークを実施して授業の目的および学生と教員が一緒に授業をつくることを意識させるとともに、学生が毎回シートに記入する意見・質問・感想等を次回以降の授業に反映させるようにした。また、「歯科診療補助・支援実習Ⅰ」においては、形成的評価として夏期休暇前に実技試験を行うとともに、学生が自主的に学習しやすい環境づくりを心がけている。

「歯科診療補助論」「歯科受療支援論」「歯科診療補助・支援実習Ⅰ」「障害者歯科学」「口腔介護予防・リハビリテーション法」の平成27年度授業評価アンケート結果は、「Ⅰ授業のあり方」の平均点はそれぞれ4.95、4.96、4.79、4.72、4.68、「Ⅱ教え方」の平均点は4.96、4.97、4.78、4.68、4.71、「Ⅲ総合評価」の平均点は4.80、4.93、4.75、4.55、4.51、「Ⅳあなたの取り組み方」の平均点は4.79、4.84、4.75、4.49、4.42であった。26年度と比較すると、1年次科目である「歯科診療補助論」「歯科受療支援論」のポイントが上昇したが、2・3年次科目のポイントはやや下降した。1年次科目については、例年どおり学生がシートに記入した内容を理解度の参考とするとともに、前週に学習した内容に関連した歯科衛生士国家試験問題をなるべく翌週に紹介し、学生が学習内容に興味を持てるようにした。なお、対象科目において、Ⅰ～Ⅲについては「2.あまりそう思わない」以下の回答はみられなかったが、「Ⅳあなたの取り組み方」については、「自分は、この授業を意欲を持って受講した」は1科目1名、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」は4科目計5名にそれらの回答がみられた。一方、「歯科診療補助論」「歯科受療支援論」では、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した」に「5.そう思う」と回答した学生の割合が大きく上昇した(歯科診療補助論: 26.8%→66.7%、歯科受療支援論: 46.3%→74.4%)。授業中に挙手をして質問する学生は未だ少数であるため、シートに質問を記入した学生が増えたことを示していると思われる。2・3年次科目では同質問に対する「5.そう思う」の回答割合は微増または微減であるため、能動的な学習姿勢の構築および維持は継続課題としたい。

学科: 歯科衛生学科 職名: 講師 氏名: 森野智子

対象科目: 歯科保健教育法(講義)、歯科衛生倫理(講義)、コミュニケーション演習(演習)

I 授業の目標・工夫など

授業の目標をこれまでと同様「根拠のある知識を身につけ、論理的な思考力を育み、さらに行動に繋げること」とし、多くの内容を盛り込んで授業を組み立てた。

上記の目標に基づき、具体的には、1年次の概論科目では新入生でもわかり易い到達目標を示すことにした。2年次の授業においては、歴史的な事実から現在進行中の事例まで、数多くの情報を紹介した。演習においては、思考の機会を設け、考えながら手法や技術が定着することを通し、後期の学内実習で総まとめできるようにデザインした。授業に際して、根拠を明確にした説明を大切にしながらも、身体や心を動かす機会を持つような授業の提供に努めた。また、卒業生から在学中の授業についての忌憚のない意見を聴く機会を持つように努力し、そこで明確化した「伝わりにくかった点」などについて修正に努めた。

学生の参加評価が低い傾向があった、概念を伝える科目においては、視聴教材を導入することで改善が図れているので、今年度も引き続き同様の授業を行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「歯科保健教育法」「歯科衛生倫理」「コミュニケーション演習」の授業評価アンケート結果は「I 授業のあり方」の平均点はそれぞれ 4.83、4.76、4.81、「II 教え方」の平均点は 4.82、4.80、4.76、「III 総合評価」の平均点は 4.72、4.79、4.73 であった。前年と比較して「歯科保健教育法」の評価はほぼ同等で学科平均と比較して高かった。これは歯科保健指導を教育に取り入れることで教育効果向上を目指した成果が、学生評価に現われたと感じる。「コミュニケーション演習」もほぼ同等で高かった。これは、教員が2コマ続きの演習運営に慣れたことが原因だと考える。「歯科衛生倫理」も同等で高かった。授業の内容が心理的に重い上に解決方法が不明確なテーマであり難しい授業だが、今後医療従事者を目指す学生にとっては、しっかり学ぶ必要がある授業内容なので、教員の狙い通りに授業を進行して、引き続き学生の意欲を高める授業準備に心がけたい。

「IV あなたの取り組み方」の平均点は 4.65、4.73、4.71 で、前年と比較して全体的に、0.06、0.20、0.17 高くなっていた。これは、授業の工夫で述べたように、卒業生の意見を教育に取り入れた効果があったと考える。改善して欲しいこととして、「まとめや感想を書いている時に話をされると、まとめに集中できないので、あまり話をしないでほしい」という意見があった。その通りだと感じたので、学生からの意見を真摯に受け止め、今後その様な事が無いように注意したいと思う。

歯科衛生学科の学生は、歯科保健指導に対する興味を持っているものの実際の指導を受けた経験が少ないことから大学教育においても早期に歯科保健指導の機会を求めているのではないかと感じた。今後も、学生の日常や背景を理解することで、ニーズにしっかり答えるような教育を行いたい。

学科：歯科衛生学科 職名：講師 氏名：山本智美

対象科目：歯科予防処置論(講義)、感染予防法(演習)、齲蝕予防処置実習(実習)

I 授業の工夫、自己評価

「歯科予防処置論」：う蝕、歯周疾患等、歯科疾患に関する統計、予防に関するトピックス、プラークコントロールの実際(方法、道具)、歯垢染色実習等、自分の目で観察したり確認し考える資料や道具を手に取り実際に使用することにより、セルフケアへの関心にもつながったと思われる。またライフステージごとの口腔保健管理について、教員の実体験を一例として示すことにより、より身近な問題として考えることができたようであった。自由記述には、配布資料がわかりやすいとのコメントが多数寄せられ、授業内容について学生への理解を促すことができたと思われる。

「感染予防法」：歯科医療になぜ感染予防が必要か、一年次の授業のため理解不十分な学生が多く、身近な感染症やその予防対策について考えることや、新聞報道を例として考える機会を作った。結果、感染予防への興味が増した、資料が豊富だったので理解しやすかった等のコメントがあり理解に役立ったと思われた。また、演習を2回実施し、手洗い(ブラックライト下での手指の汚れの観察、ハンドスタンプの実施)や滅菌・消毒・洗浄等、機械・器具に触れたり、目で確認することで歯科医療における感染予防の必要性を少しずつ理解できたことが、レポートから読み取れた。提出レポートに対しては、毎回一人ひとり丁寧にコメントを付しており、学生からは高評価を得た。

「齲蝕予防処置実習」：実習の事前に毎回講義を実施し、目的、実習に際し必要な知識、術式、使用器具、注意事項等を詳細に説明した。また実習では毎回、デモンストレーションを行い、実習中は手順が理解できるようモニターに手順、注意事項を文字や写真で写し出し、学生が理解しやすいよう努めた。う蝕予防処置の対象は小児であることが多く、小児を対象とした実習を設定し、術者、補助者の際には小児への声かけや動作の説明等、小児へのう蝕予防処置がスムーズにいくための配慮を体験してもらった。患者、術者、補助者の3つの役割を体験することにより、相手の気持ちを考えることができ、処置の手技だけでなくコミュニケーションの重要性についても理解できたことが、提出レポートから読み取ることができた。

どの科目も授業評価アンケート項目の授業のあり方、教え方、総合評価について4.5以上であり、概ね学生は授業に関心を持ち、内容も理解できたのではないと思われる。

II 今後の改善・工夫、学生に期待すること

わかり易い授業を心がけた結果、説明が長くなることがあったり、その反面、内容が多い時はスピードを上げて早口で話してしまうことがあり、ポイントを絞り、重要な点をより明確にしていくことが課題である。一方的な授業になることのないよう、学生自身が授業に参加するような進め方や、学生自身による資料集め等、教員が提供するだけでなく、自ら学ぶ姿勢を向上させていきたいと考える。自主的に興味を深められるような授業の展開を模索していきたい。学生には学んだ知識を日々の生活やセルフケアに応用し、理解を深めていってもらいたいと考える。

学科：社会福祉学科 職名：教授 氏名：漁田俊子

授業評価アンケート対象科目：①人間関係と援助技術（講義：学科共通科目：歯科衛生学科、社会福祉学科）、②保育の心理学Ⅰ（講義：社会福祉専攻）、③発達と老化Ⅰ（講義：介護福祉専攻）、④乳幼児・児童の心理（講義：社会福祉専攻）、⑤心のしくみ（講義：介護福祉専攻）、⑥保育の心理学Ⅱ（演習：社会福祉専攻）、⑦社会福祉演習（演習：社会福祉専攻）、⑧保育実践演習・卒業研究（演習：社会福祉専攻）

I 授業の目標・工夫など

＜講義科目①～⑧共通のねらい：8科目中には、2名の教員が全開講時間の半数ずつを担当するオムニバス形式の授業も4科目含まれているが、下記のねらいは漁田担当分のみの内容である＞

- ・発達概念、対人関係についての理解。
- ・心理学の方法論の理解。
- ・乳幼児期から老年期に至るまでの発達（臨界期、認知、社会性など）の理解。
- ・社会的な援助と人の心の関係についての理解。

＜工夫＞

- ・全ての授業について、理解と記憶の定着のため、出来る限り具体例を挙げて心理学の理論を説明した。また、紙媒体の資料を多く配付するようにした。
- ・第1回目の授業で、「この授業のねらい」と「この授業の課題」を詳しく説明し、最終授業時に、課題達成の確認を行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

- ・「Ⅰ授業のあり方」（4項目）、「Ⅱ教え方」（6項目）、「Ⅲ総合評価」（3項目）の平均点数の結果について（5点満点）：それぞれ、①人間関係と援助技術は4.85、4.85、4.76、②保育の心理学Ⅰは4.48、4.70、4.44、③発達と老化Ⅰは4.75、4.76、4.72、④乳幼児・児童の心理は4.66、4.82、4.70、⑤心のしくみは4.51、4.59、4.39、⑥保育の心理学Ⅱは4.63、4.73、4.69、⑦社会福祉演習は4.30、4.60、4.53、⑧保育実践演習・卒業研究5.00、5.00、5.00、であった。学科の平均値と比較すると、①～⑧全科目について、「Ⅳあなたの取り組み方」も含み、殆ど全ての項目が平均値をかなり上回った。
- ・自由記述欄について：多くの記入があったが、殆ど全てが「事例がわかりやすい」「授業が楽しかった」という内容であり、受講生の満足度が高いことが伝わってきた。一方、「改善してほしい項目」では、①人間関係と援助技術（オムニバスでやっているもう1人の教員の多数の休講について）「2人いるのに休講が無駄。」という意見があった。オムニバス方式での教員同士の連絡をさらに密にする必要があると思われる。また、「（声のトーンが）眠くなる」という意見が8科目中、2件あった。メリハリのあふトーンで話すことを今後は心がけたい。

学科:社会福祉学科 職名:教授 氏名:佐々木 隆志

対象科目:老人福祉論(社1・講義)、高齢者の生活の理解(介1・講義)、児童福祉論(介2・講義)、保育実践演習・卒業研究(社2・演習)、社会福祉演習(社1・演習)、ソーシャルワーク実習指導(社2・学内指導)、ソーシャルワーク実習(社2・実習)、

今年度の授業評価の中で、筆者の反省点は介護福祉専攻2年で開設されている児童福祉論について全体的に学科専攻平均点より下回っていた。同科目はこれまで、平均的に授業のあり方、教え方などは高い評価を得てきた。この結果を筆者が分析したところ、自由記述の中でその問題点が把握できた。介護福祉専攻2年生は後期で4週間の学外実習の為、その4回分を随所で補講を組まなければならない。これは当該科目に限らず実習中の科目は全てに共通している。そこで、学生からのアンケートの中で、「改善項目」として「あまりにも授業変更が多くユニパにも反映しないので困る」等の意見があった。この授業変更に関しては、教務委員を通し後期の授業計画の空きコマに埋めていく予定を組み、教員は既に学生に周知されているものと理解していたが、実態では「児童福祉論」はユニパに反映されていないことが分かった。この点は反省するところであり、今後常に教務委員と連携を密にし、事前に変更内容を学生に周知する必要性を強く感じた。

自由記述の中で「良いと思ったこと」、「感心したと思うこと」の項目では、この講義を通して「自分の老後のあり方を考えるような機会になりました」等の意見もあり評価されていた。今後も高齢者の生活の理解や児童福祉については、近年の児童虐待問題や少子化の社会的背景及び課題について、事例を取り入れながら常に授業展開を工夫し、学生の理解度に配慮した授業を進めていきたい。社会福祉専攻「老人福祉論」では、講義の工夫に、相談援助の視点から老人福祉の理念、老人福祉論の体系、サービスの利用の仕方、人権擁護の視点から講義を進めた。なかでも、近年の高齢者虐待の現状をどのように受け止めるか。無届け老人ハウスが全国的に増えている傾向のなかで、介護を必要としている方々が、サービスを受けられない状況にある点を意識しながら講義を工夫した。全体的には高い評価を得ていた。

評価全体をみると、「Ⅱ、教え方」部分では高い評価を得ている。「毎回の授業の量や進度は適切であった。」「教員の授業に対する熱意が感じられた」の項目が高い評価となっている。自由記述の部分では、「板書がとても見やすかった」「授業がおもしろかった」「板書が終わるまでまってくれた」等があり、「改善して欲しいこと」では、「字が少し読みにくい」「授業変更がユニパに反映されていない」等があった。また、老人福祉論の「授業のあり方」では社会福祉専攻全体の平均よりも高い傾向にあった。いつの学年でも感じる点は、学生層は毎年異なり学生のニーズに合った講義が常に求められていると思う。さらに、高齢者分野では、制度の変化が速く、常に最新の情報を学生にわかりやすく伝えること。あきない授業、あかるい授業、ユーモアのある授業、教員自ら明るくなければ、明るい講義は限界があると思っている。今後も対象学生が異なる点を意識しながら、学生の学ぶ視点・視線に合った高等教育を保障し、質の高い講義・演習を進めていきたい。学生のコメント・評価に深謝します。ありがとうございました。(佐々木, 2016, 6, 5)

学科：社会福祉学科 職名：教授 氏名：永倉みゆき
対象科目：保育内容（人間関係）（演習）、保育内容（環境）（演習）、保育内容（健康）（演習）、保育内容（言葉）（演習） 保育内容（総論）（演習） 乳児保育（演習）

I 授業の目標・工夫など

どの科目に於いても ①保育の理論的な理解（「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」等の理解）②理論を実践とつなげて理解できる事 ③理解を行動に繋げることが出来ることを目的に授業を組み立てた。

内容に関しては、「人間関係」では、実習のエピソードを使って授業を行う、ロールプレイを取り入れるなどにより、授業内容を実感を伴って理解ができるように工夫をした。また、「環境」「保育内容総論」では、グループでの調べ学習や発表を入れる、出来る限り実物に触れることができるようにした。「乳児保育」では、子育て支援活動の機会を活用して、実践的な学びができるようにし、自分の地域の実情を調べることも取り入れた。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

設問項目の中では、16「疑問点を必要に応じて教員に質問した」という項目がどの教科も低く、出来る限り小レポートの意見を取り上げるよう努力はしたが、更に丁寧に見ていく必要があるかと思われる。今後は、質問を引き出す工夫や質問しやすい雰囲気づくりなどを心がけたい。本学の学生の特徴として、出された課題には真面目に取り組むことができると感じているので、今後はそれらの課題を取り上げながら疑問点などを引き出すことが出来るように工夫したい。

「保育内容（言葉）」のオリジナル設問「この授業で学んだことが実践に活かせる」について、4.32 と低い点については、言葉の授業で扱った内容の幅が広すぎて、十分深めることが出来なかったためかと思うので、今後は前述した課題などを活用して授業を進めていくようにしたい。

学生が授業後を書く小レポートのコメントや、この授業評価でのコメントはとても授業作成に参考になるものであり、教員として耳を傾ける必要を感じた。「乳児保育」（通年科目）のコメントの中に「もっと教科書を使用して欲しい」というものがあったが、前期では「病児保育」を取り上げて話し合いをしたり、後期では子育て支援活動等によって実践的に授業を進めたりしたため、教科書を使用しない回もあった。演習科目であると、学生の出方によって授業の方向を変えることも多々あり、かといって全く教科書を使用しないのでは資料が膨大になるため、教科書を活用する回もあり、難しさを感じるが、他の教員の授業なども参考にして改善をしていきたい。

III 学生に関して

学生の雰囲気によっても授業の深まり方が違うが、今年の学生（特に2年生）は積極的にグループ活動など参加型の授業が特にやりやすく学生に助けられた部分も大きい。今後は、参加することと、深く考えることの両面ができる授業を目指して授業力を上げていきたい。

学科:社会福祉学科 職名:教授 氏名:三田英二

対象科目:

・社会福祉専攻開講科目

保育の心理学Ⅰ(講義、分担担当)、保育の心理学Ⅱ(演習、分担担当)

・介護福祉専攻開講科目

心のしくみ(講義、分担担当)

I 授業の目標・工夫など

当該年度から、介護福祉専攻2年次開講科目「相談援助の理論と方法」がカリキュラム改訂により、廃止されたため、介護福祉専攻での担当科目が1年次の「心のしくみ」だけになった。このため、「心のしくみ」の授業内容に相談援助に活用できる内容を出来るだけ多く取り入れるようにした。

社会福祉専攻では、例年通り、1年次の講義科目である「保育の心理学Ⅰ」で人格発達の理解を深められるような授業内容に心がけ、2年次での講義科目「臨床心理学」で対人援助の方法を多角的に考えられるような授業展開にした。

授業アンケートの結果、学科平均レベルを若干下回る評価であるが、平均点だけが示され、標準偏差が示されていないため、学科平均レベルと断言できないが、大きく下回っていることはない。今後、上記のような目標を立て、講義を展開していきたいと考えている。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

アンケートの評価点は、上述のように、学科平均を若干下回る評価点であった。自由記述においては「分かりやすかった」など肯定的な評価と「話しが難しく分かりにくい」という否定的な評価が半々程度記載された。また、参考資料として印刷物を配布し、授業を展開することが多いが、これに関しても「分かりやすい」・「資料内容が難しい」など上述と同様のコメントが見られている。

科目の特性上、座学となってしまう。たとえ話(先行オーガナイザー)を多用し、出来る限り、多くの学生が興味を引けるように心がけたい。

「保育の心理学Ⅱ」は、分担担当科目であるが、演習科目のため、担当時間の多くをグループ発表に当てたが、今年度(平成28年度)から、新設学科開設に伴い、単独で担当することになった。これまで、グループ発表後に、発表に対するコメント、発表の中での重要なポイント、また、発表に関する関連事項などを解説していたが、事前の講義も取り入れていこうと考えている。

なお、当該年度の「臨床心理学」は、授業アンケートを実施するための受講者数に満たなかったため、アンケートは実施されていない。

学科・専攻:社会福祉学科社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:江原勝幸
対象科目:社会福祉原論(講義)

I 授業の目標・工夫など

授業の目的は「社会福祉の原理と理念、歴史、法・制度等の基礎構造について体系的に理解する」こととし、授業の到達目標を以下に設定した。

- 1) 社会福祉の原理、対象、歴史、援助技術、担い手、組織運営と経営、制度など社会福祉の基礎構造を支える理論・仕組み（原論）を説明することができる
- 2) 社会福祉について自分自身の生活から見つめ直し、自分の言葉で「社会福祉とは何か」を述べることができる。
- 3) 新聞記事・テレビ番組などを活用し、現代社会の福祉的諸問題の光と陰について考察することができる

これまでの授業評価において、ビデオ映像を用いた教材の活用は学生に高い評価を得ており、その時々で話題・問題となっていることを取り入れるように工夫した(H27 年度は、新潟水俣病、ハンセン病、下流老人、子どもの貧困、子ども食堂など)。また、障害当事者と支援者、静岡市社会福祉協議会職員(ボランティア担当)をゲストスピーカーに招き、授業内容と関連付けて自立やエンパワメントなど社会福祉の基盤である価値や倫理について実践的に学ぶ機会を複数回設けた。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

1 年次通年の講義科目であり、社会福祉の原理・原則、歴史、制度などその基礎構造を理解するための重要な科目である。通年という利点を生かし、前期で原理・原則を中心に基盤を押さえ、後期に制度・歴史について理解を深める段階的・発展的な内容・方法を用いている。例年、授業のあり方や教え方などは基本的に変更しておらず、テキストを使用しない授業の 3 年目に入り、授業の構成・内容に縛られないメリットを授業進行に活かすことができた。授業は、レジュメと関連資料（主に新聞記事）を毎回配布し、ポイントを押さえた授業展開を進めた。視覚に訴える授業は学生が興味を持ち、理解度も高まるため、ほぼ毎回授業に関連するビデオ映像を用いた。単純なビデオ視聴では授業との関連性が弱くなりがちのため、その感想・意見等を書き込んで提出するワークシートを作成し、配布・記入後の回収をした。

結果的には全体的に昨年度より若干点数が低いものの、学科・専攻平均点をすべての項目で上回った。平均点が高いものは #14「出席努力」、#7「教員の熱意」、#3「難易度」、#15「意欲的受講」であった。#16「教員への質問」はこれまでの授業評価でもポイントは低い傾向にあったが、27 年度は 3.88 と最も低い評価であった(25 年度は 3.44 で最低、26 年度は 4.12 で最低)。

今年度の授業は、この結果を参考に授業を組み立てていくことになるが、特に #16 への配慮・工夫が求められる。手を挙げた質問の促しだけでなく、ワークシートの質問欄記入や授業後のフランクな対応などを行い、それを全体にもフィードバックさせる取り組みを実施する。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:准教授 氏名:川島貴美江
対象科目:ソーシャルワーク論Ⅰ(講義)、ソーシャルワーク論Ⅳ(講義)、人間関係と援助技術(講義)、社会福祉概論(講義)、ソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(演習)、保育実習指導Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(講義)、保育相談支援(演習)

Ⅰ 授業の目的・目標など

ソーシャルワーク論(Ⅰ・Ⅳ)は、保育士・社会福祉士に必要な対人援助技術の目的、価値、原則や援助技術の方法、内容、利用者理解の方法、さらに援助の展開過程における知識、技術を学ぶ。ソーシャルワーク演習(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)はソーシャルワーク理論の学びを応用的・実践的に学ぶことを目標とする。演習においては、保育実習や現場実習などの体験をもとに、援助技術が実際どのように活用されているのかソーシャルワーク論で学んだ視点を確認する機会とする。さらに理論と実際を検証したり、再度、援助者としての自己理解を深めたり、援助技術のさまざまな技術をより確かなものとするができるよう動機づける。人間関係と援助技術は歯科衛生学科、社会福祉学科の学生を対象に講義する。社会福祉援助技術が蓄積してきた人間援助の方法、保健・医療・福祉の連携を可能にする援助の共通基盤の原則や専門職理論について学ぶことを目的とする。保育相談支援は2011年度生から保育士必修の科目として導入された。保育士の専門性を生かした保護者支援の技術を学ぶ。

Ⅱ 授業の自己点検・自己評価

ソーシャルワーク理論は、マニュアルで扱う範囲を超えたもの、つまり複雑で個別性の高いものである。そして援助を必要とする利用者や家族の理解を踏まえつつ信頼関係を構築して援助の道とともに歩いていくことであり、そのような援助実践をふりかえることが必要となる。講義においては、事例の提供を通して援助技術の臨床場面と技術の実際を結びつけるよう努めた。ソーシャルワーク論Ⅰは入学後の1年前期開講であり、イメージがつかみにくい。2年生後期に開講されるソーシャルワーク論Ⅳになると実習経験などにより理解が深まるように感じられる。演習は、自分ならどの援助技術を用いて解決するのか考えること、援助方法は幾通りもの解決方法があることをねらいとしているので、将来役に立つ講義・演習であるという学生の記述が散見されることはソーシャルワークの講義・演習の目標に近づいていると思う。しかし2年生における講義・演習においては学生の関心・意欲が薄れている傾向が見られた。保育相談支援は、将来、連携する職種の保健師による講義、発達相談員などの講義を組み入れたことが好評であった。

Ⅲ 授業改善の展望

ソーシャルワーク演習は、学生の感性、関心、個性をみて援助者としての自己覚知を進めていくよう今後も工夫していく。グループワークに参加できない学生、ディスカッションできない、コミュニケーション力に乏しい学生、記録を書けない学生など、ソーシャルワークを進めていく上で大切なスキルを磨くため、より個別的な配慮を必要とする学生がいる。援助論を学び、援助者となるトレーニング機会となる演習は、ソーシャルワークの奥深さ、現場で頑張ろうとする意欲へつなげる時間となるので、学生の思いに寄り添いながらすすめていく。ソーシャルワーク論Ⅳ(講義)においては、話している時の内容が、時々分からなくなり、理解できずに進んでしまうとの評価があったので、時間のはじめに講義の構成、講義のねらいを明確に示し、内容が散漫にならないよう意識し、学生理解の確認をして進めるよう心掛けたい。

学科：社会福祉学科 職名：教授/漁田俊子 教授/永倉みゆき 准教授/川島貴美江 講師/山本学 助教/庭野晃子

対象科目：保育実習指導Ⅰ、保育実習指導Ⅱ、保育実習指導Ⅲ

Ⅰ 授業の目標・工夫など

「保育実習指導Ⅰ」は1年次後期から2年次前期に渡って開講される科目であり、学外で行われる「保育実習Ⅰ」のための事前・事後指導を行う。「保育実習Ⅰ」は配属された保育所・施設での実習体験を通して施設機能と保育士の役割・職務内容を理解すること、さらには保育士としての適性について考えることを目的としている。そのために「保育実習指導Ⅰ」の授業では実習の本質的な意義や目的を伝える講義に加え、具体的な「課題の設定」、「日誌の書き方」、「指導案のたて方」、「事例検討の方法」、「実技指導」等の実践的な講義や、施設理解を深めるための外部講師（現場の施設長や指導者）の講演を取り入れている。

2年次開講の「保育実習指導Ⅱ」および「保育実習指導Ⅲ」は、それぞれ学外で行われる「保育実習Ⅱ（保育所）」「保育実習Ⅲ（保育所を除く社会福祉施設）」（どちらか一つを選択）の事前・事後指導を行う科目である。事前学習では、学外の実習をより実効あるものにするための施設研究や、指導案の書き方、事例検討の方法、実技指導（パネルシアター、エプロンシアター、壁面構成、介護技術）等の講義・演習を組み入れている。

また、実習巡回指導教員による担当学生の個別指導にも力を注ぎ、それぞれの実習に対して3コマ以上を確保している。実習終了後は学生運営による全体報告会と巡回指導教員による個別面接指導が行われる。

Ⅱ 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

保育実習指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲについては、授業のあり方・教え方・総合評価・あなたの取り組み方など設問項目の平均は、ほぼ学科・専攻の平均を上回る。実習講義の計画性、工夫、学生への対応が反映した結果、学生自身の取り組み姿勢が前向きであり意欲や態度を育て外部での実習へと好循環させることができたと思われる。保育実習指導Ⅰは、短大での初めての実習となる保育所実習への不安を和らげ、丁寧な事前準備を心掛けている。また、本年度初めての講義として、1年生と2年生とのグループワークを行い、2年生から実習経験を伝えたり、1年生からの質問に答える時間を設けた。学生からは大変好評であった。

保育実習指導Ⅱ、Ⅲについては保育実習指導Ⅰより高評価を得ている。保育実習Ⅱ・Ⅲは保育実習の最後の実習であり、学生自身が意欲的・目的的に保育所実習か施設実習かを選択するので、学生の目的意欲・意識に応えられる講義でなくてはならない。実習先選択に当たり、可能な範囲で学生の希望を尊重しつつ、将来の適正を見出すよう講義をくみたてている。特に保育実習Ⅲは、多種・多様な施設で実施するので、より個別的でかつ質の高い連携指導が必要である。講義は全体によるものと個別指導によるものとあるが、教員間のチームワーク、情報共有、打ち合わせを綿密にしていけることが大切である。毎月1回開催する保育実習運営委員会を一層機能させていきたい。

学科:社会福祉学科 職名:准教授 氏名:中澤秀一

対象科目:社会保障論(講義)、社会保障論(講義)、公的扶助論(講義)、公的扶助(講義)

I 授業の目標・工夫など

例年に引き続き学生が受動的にならないように、できるだけ発言の機会を設け、アウトプットできる環境を整えた。今年度も最も効果が上がったと思われるのが、学生同士で議論をさせる「ディベート」である。テーマを設定して、立論→反論→再反論を繰り返したのだが、自分で意見をまとめて、かつ他人を説得できるように論じることや、立場の違う意見を聞くことが、「自分で考え」と「他人の考え」とがぶつかる機会となり新鮮だったようである。授業アンケートの自由記述欄だけではなく、期末試験の論述問題でも、上述の感想が述べられていた。ほかには、毎回授業の初めに行う復習テスト(小テスト)が効果的であったようである。こまめに振り返りを行うことで知識が定着することのほか、学生とのコミュニケーションが取れることも利点としてあるようである。

今年度からは全面的にパワーポイントの授業を実施し、視覚にも訴えながら理解度が高まるよう工夫を加えていった。授業アンケートの自由記述欄にも「パワーポイントが見やすかった」という意見がみられ、おおむね好評であった。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業評価アンケートの結果をみると、まず「授業は計画的に展開されていた(授業内容の構成や流れは適切であった。)」については、社会保障論(社会福祉専攻1年)で4.76(4.44)、社会保障論(介護福祉専攻2年)で4.43(4.30)、公的扶助論で4.72(4.49)、公的扶助で4.48(4.32)等であった(括弧内の数字は学科・専攻の平均点)。いずれも高評価であり、事前に組み立てた構成が良かったのではないかと考える。今後も授業準備を怠らないようにしたい。

また、「この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった」については、社会保障論(社会福祉専攻1年)で4.71(4.45)、社会保障論(介護福祉専攻2年)で4.34(4.24)、公的扶助論で4.81(4.49)、公的扶助で4.41(4.26)等であった。こちらでもいずれも学科・専攻の平均点を上回っており、上記の授業目標が達成できているとの自己評価であるが、もう少し授業内容の理解度を上げられそうである。今後の反省点としたい。

自由記述欄には、「保険のことなど今まで知らなかったことを知ることができて、とても勉強になった」「社会のウラ、影の部分を見ることができ、社会に対する危機感をもつことができた」などの記述がみられた。また、「ビデオがとても印象的でした」など視聴覚教材に対する評価も高かった。今後も教材探しに努めたい。

今年度からパワーポイントの利用が増えたが、スライドを進める速度に一部の学生が追いついていない場面もみられた。学生の反応もみながら、効果的な切り替えの速度を模索していきたい。

学科名：社会福祉学科 職名：准教授 氏名：松平千佳

対象科目 ソーシャルワーク論Ⅱ ソーシャルワーク論Ⅲ ソーシャルワーク演習Ⅰ ソーシャルワーク演習Ⅱ ソーシャルワーク演習Ⅲ ソーシャルワーク実習指導
ソーシャルワーク実習 卒業研究 総合科目「ホスピタル・プレイ入門」

I. 授業の目標・工夫など

対人援助者として必要な知識、技術、そして態度を学習することを、主目的にソーシャルワーク系の講義及び演習科目を組み立てている。またすべての科目において、座学ではなく実際に体験して「できる」感覚を身につけてもらえるような工夫をしている。教員の立ち位置はファシリテーターであり、学生自身、また学生の小集団を作り学びあうことを重視しており、そのための工夫をおこなっている。例えば、権利擁護にかんする学びを深めるために、権利のオークションを行い権利の優先順位を学ぶ。また権利が抽象的なものではなく、われわれの生活に密着していることを理解するために、必要だと考える権利を出品するための話し合いをおこなう。このように、学生が自ら学べる工夫を凝らしている。

II. 授業の自己点検・自己評価

ソーシャルワーク論ⅡとⅢにかんしては、ソーシャルワーカーに必要なマインドの形成、知識の獲得、および技術の理解を主な柱に組み立てている。現代社会を見つめ、ソーシャルワーカーの役割を学ぶことに、多くの学生が関心を持ち、どんどんと成長していくさまが見て取れてうれしい。クライアントの権利擁護者として援助実践ができるように、権利に関する学びとともに、個別支援計画の立て方や、ケースマネジメントにかんする理論を学ぶ。総合的な満足度が、両科目とも4.6以上であったことに満足している。

ソーシャルワーク演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲは、1年半にわたるソーシャルワークの中核的な科目であり、本格的に社会福祉の援助技術を学ぶ演習科目である。保育士資格のみの学生にも対人援助者としての立場を理解できるように、事例にかんしては対象を子どもや家族に設定するようにしている。特に家族の中に存在する問題に関する演習内容においては、少なからずの学生が、自分自身の家族と向き合う時間となっており、プレゼンテーションの試験において感動的な成長を示してくれる学生も多い。演習も評価が4.6以上となっており、大変うれしい。

総合科目「ホスピタル・プレイ入門」（全学対象）は、本学の社会人講座を修了したHPS2名が講師として来校しており、実践的な内容を教えている。このように修了生が来て教える取り組みを、文部科学省も評価しており、大学の質的転換を図るための取り組みの1つに選ばれている。病児を支援するという視点は、既存の学びでは全くないため、新鮮だとの評価である。講師は、病院内の活動が分かる動画などを使っているため、就職後の気持ちの準備にもつながっているようである。必ず演習的な内容も取り入れるようにし、学生が医療や福祉の現場に出た際には、HPSマインドに基づき支援できるように心がけている。総合評価は高く、特にすべての科目において質問12の「この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容だった」において高い評価となっていることが喜ばしい。

III. 授業改善の展望

年々、生活や健康に課題のある学生が入学してきており、グループを作りチームとして

発展させることが困難な場合もある。さらに研鑽を重ねたい。

学科・専攻:社会福祉学科・社会福祉専攻 職名:講師 氏名:山本学
対象科目:保育表現技術Ⅱ(音楽)(演習)、音楽通論(講義)

授業評価アンケートの集計結果、自由記述に対するコメント

○保育表現技術Ⅱ(音楽)(山本学、田代千早、原川洋子、原田大雪、丸尾真紀子、八木名菜子、山田美穂子、鷺巣貴乃)

本授業は、同Ⅰでピアノ奏法の基礎を学習した後、45分間はピアノ伴奏法、特に子ども対象の想定で実践的な内容を学習する。また、声楽、ギター、管打楽器、音楽療法を残り45分で選択履修する。授業はレパートリーカードを採用し、独自の工夫を行っている。

集計結果は昨年度と比べ、ほぼ同じアンケートの数値となった。また、Ⅲ総合評価学科においては学科の平均点を大きく上回った。学生の満足度を得られた要因として3つ考えられる。一つ目は、各担当講師が、それぞれの音楽の専門分野を生かすことができる方式であり、学生にとって大きな学びであったこと、二つ目は、課題の量を担当者としては少なめに設定することで、学生にとってはちょうど満身に消化できる量であったこと、三つ目は、ピアノも選択音楽も学生が自分で学ぼうとするアクティブラーニングのような方式が本学の学生に合っていたことである。

昨年度の自由記述の改善要望として上げられていた「他の音楽教員の指導時間の増加」については、時間外の指導を設定し、一度に見てもらおう曲を制限することでやや改善することができた。

○音楽通論(単独担当)

本授業は、音楽史、楽典、曲の知識などを複合的、有機的に講義している。

昨年リアクションペーパーや学生の反応から、難しすぎるとされた箇所はより平易に改善した。また、結果的に学生の興味を惹かず、学生の身にならなかったと判断した回の講義は新たにスクラップ&ビルドを行った。結果、昨年度は平均点を下回っていたが今年度は約0.5ポイント上がることもできた。

リアクションペーパーからは、特に2つの講義が印象的だったようである。一つ目は静岡大学や国立音楽大学(静岡市出身)の学生の生演奏とその解説で行った講義、二つ目はオペラ、ミュージカル、映画、ドラマ等の映像に表れるクラシック音楽の解説の講義である。どちらも今年度から導入したものである。生演奏は、相手方の都合もあるので継続できるかはわからないが、機会があればできるだけ触れていきたいと思う。教養としては、多少難解でもそれに触れることが意味あることだと考えているが、なにか一つ学生の印象や刺激になれば、他が難解でも興味を継続できるということを学んだ。

学科・専攻：社会福祉学科・介護福祉専攻 職名：教授 氏名：高木剛
対象科目：介護過程A（講義）、介護福祉論Ⅱ（講義）

1. 介護過程A

学生からの評価が高かった項目として、「教員の授業に対する熱意が感じられた」「授業の目的、目標が明示されていた」などが挙げられるが、反面、「教員は、学生に対して誠実に対応していた」「毎回の授業の量や進度は適切であった」などが低かった。また、自由記述として、「1つ1つ丁寧に説明していて、わかりやすく、毎回の授業で復習しながら授業していたため良いと思った」「プリントがあってわかりやすかった」などの感想があった反面、「プリントに余白をつくってほしい」「もっと内容を難しくしてよかったと思う」などの感想が見られた。

私が本学に赴任（10月1日）してすぐに本科目の授業を担当したため、学生の状況（基礎学力、学修意欲、理解力など）について情報を十分に得られず、授業に反映できなかった。今後は、学生の状況に応じて授業の量や進度などを調整するとともに、プリントを作成する際には余白を確保するなどの配慮・工夫をしていきたい。

2. 介護福祉論Ⅱ

学生からの評価が比較的高かった項目として、「授業の目的、目標が明示されていた」「教員の授業に対する熱意が感じられた」などが挙げられるが、反面、「教員は、学生に対して誠実に対応していた」「教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」などが低かった。また、自由記述として、「細かくレジュメを作ってくださり、まとめ方も分かりやすかった」「黒板の文字がきれいで良かった」などの感想があった反面、「新聞の切り抜きはとても参考になるが、先生のコメントが長すぎて授業が短くなるのを改善してほしい」「テスト対策用の復習プリントの答えがほしい」などの感想が見られた。

私が本学に赴任（10月1日）してすぐに本科目の授業を担当したため、学生の状況（基礎学力、学修意欲、理解力など）について情報を十分に得られず、授業に反映できなかった。特に、本科目では介護に関係する法令・制度について学ぶ内容が少なくないため、学生の理解度に大きな差が生じた可能性がある。今後は、できる限り難解な用語は避け、わかりやすく説明していきたい。

新聞の切り抜きは、介護に纏わる社会状況について理解を深めるために学生に課したものであるが、それに対する私のコメントがやや長かったかもしれない。今後は、簡潔なコメントを心掛けたい。また、テスト対策用の復習プリントは、授業内容のポイントについて問題形式にしたものであり、教科書や配布資料などをきちんと確認すれば解答できる水準である。わからないことを調べようとせず、安易に答えを得ようとする学生が少なくないように感じる。したがって、（答えをほしい旨の学生の声はあるが）今後も当該プリントの答えを配布するつもりはない。

学科:社会福祉学科 職名:准教授 氏名:奥田都子

対象科目:家族支援論(講義)、家族福祉論(講義)、生活支援技術Ⅰ(演習)、
介護レクリエーションⅠ(演習)、介護実習指導Ⅱ(演習)、社会福祉演習(演習)

I 授業の目標・工夫など

社会福祉専攻の「家族支援論」は、保育士資格取得必修科目である。受講生の大半は社会福祉士受験基礎資格も目指していることから、既習の児童家庭福祉関連の授業内容との重複をできるだけ避け、支援対象となる家族そのものに対する理解を深めることに重点をおくとともに、保育現場における具体的な家族支援の技術習得を目標とし、ロールプレイ等の演習を取り入れている。

介護福祉専攻の「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」については、いずれも家族の福祉ニーズに目を向け、生活の諸問題を解決していくための知識や技術、考え方を身につけ、問題解決能力を養うことをねらいとしており、自分自身の生活上の問題に目を向けることから始め、最終的には、援助者として福祉サービス利用者とその家族の生活を支援するための生活支援能力を養うことを目標としている。「介護レクリエーションⅠ」は、福祉現場におけるレクリエーション提供に向けて、生活文化を活用したレクリエーションの理論と実践について演習を通して学ぶことをねらいとしている。

また、「介護実習指導Ⅱ」は、介護福祉専攻2年次における2回の実習の事前事後指導科目であり、全体の授業運営を奥田、天野が担当し、専攻の全教員が分担して、実習課題の作成、実習記録、報告会発表、実習報告書作成について、期日を守り適切に行なわれるよう指導・助言を行っている。全体指導では、現場職員や卒業生から現場での実体験を聞く機会を設け、できるだけ、実習現場や就職先で役立つ情報を提供できるように工夫をはかっている。

II アンケート結果に対する自己評価と今後の改善・工夫

「家族支援論」は講義科目であるが、昨年の授業で学生の反応の良かったディベートを今年も1回取り入れ、後半では保育現場での具体的な家族援助場面を想定したロールプレイを行った。そのねらいは保育士と保護者の両方の立場と意思について考え、演じることを通して援助のありかたについて体験的に学ばせることにある。集計結果についてみると、平均点ではおおむね好評価ではあるが、自由記述がほとんどなかったため、最終レポートでの学生の記述を抜粋すると、「事例を考えるだけでなく、ロールプレイを演じることで、どのようなことに配慮すべきか、伝えるべきかについて具体的にわかった」「クラスメートの演技を見て、自分では思いつかなかった対応や、このような表現もあるのかと勉強になった」「保護者役を演じてみて、保育士のちょっとした言動や説明不足に、傷ついたり嫌な思いをすることを実感した」などの回答にみるように概ね良好であり、この方式による授業運営は、講義を通して学び、考え、行動することに貢献していると思われるので、今後も継続・拡充していきたい。

また、「家族福祉論」「生活支援技術Ⅰ」では、生活上の問題に気づかせ、その解決・改善に向けての行動や社会資源の活用についての検討を通して援助のプロセスを学んでいくが、介護技術に比べると「この知識・技術を習得した」「できなかったことができるようになった」という明確な実感や達成感は生じにくい。そこで、授業では福祉サービス利用者が生活場面で問題に直面する事例を設定して、学んだ知識や技術をどの様に用いれば生活支援に役立つのかを体得することができるようにワークシートを用いたり、ロールプレイを通して実践的に考える機会を設けている。また、生活支援技術Ⅰでは、身近な高齢者・年長者へのインタビューを課し、そのライフヒストリーを作成す

るという課題に取り組ませることも例年行っている。

アンケートの回答からは、生活支援技術Ⅰのライフストーリー作成についてのコメントが多数見られ、規定の文字数の多さが学生にかなりの負荷を与えていることが読み取れるが、同時に、コピペのできない 4000 字以上のレポートを完成させたことによる大きな達成感も多く語られている。家族福祉論で用いているロールプレイについても、自由記述に肯定評価が多く見られることから、大多数の学生にとってはこの方法が効果的であったと判断できる。とはいえ、グループワークはメンバー構成によっては話し合いや作業が進まずに遊んでしまう危惧もあり、すべてのグループが時間内に課題を達成できるとは限らないため、グループのメンバー構成を見ながら教員が随時声をかけ、助言を与えるなどの工夫を行ないたい。

「介護レクリエーションⅠ」については、座学による理論編と、グループワークによる実践編を組み合わせた授業展開を工夫したが、アンケート結果から、グループワークにおける制作や実践の満足感や意欲がたいへん高かったことがわかり、自由記述では多くの予想を超える好反応が得られた。この結果から、座学での理論編については、実践と連動させることによってわかりやすく伝える工夫をしていくとともに、グループワークでの意欲を維持できるように、時間配分などに細かい配慮を加えていきたいと考える。また、改善して欲しいこととして、時間の少なさやあわただしい進行、制作以外のレクリエーションも取り入れて欲しいなどの指摘が散見された。8 回という限られた時間の制約の中で圧縮した授業展開のため、このような不満が出てしまうことは無理もないが、身体を動かす系統のレクリエーション内容が、現行のカリキュラムの中にないことに起因しているため、専攻のカリキュラム構成の課題として考えたい。

「介護実習指導Ⅱ」については、自由記述の改善して欲しいことの中に、実習配属時の交通費負担への配慮を求める意見があったが、原則として本人の希望による配属をしているため、今後は、配属希望の時点で、交通費負担の予想額を本人に確認するなどの対応をしていきたい。

全体の総括として、グループワークやロールプレイなど学生が自ら展開していく力を活用した授業形式は、舵取りの難しさもあるが、学生の学ぶ意欲を喚起し、授業への関心を高めることには大いに効果があつたと感じる。また、自由記述では、(作品や発表への)適切なコメントや、リアクションペーパーへのコメントなど、学生が授業を通してのキャッチボールを期待していることがわかった。なかなか人前での質問ができない学生たちであるが、リアクションペーパーを通しての質問は、こちらが答えるほどに活発になっていくことが実感できた。

今後も、学生とのキャッチボールを心がけ、意欲を引き出す工夫を続けていくとともに、ディスカッションのまとめ方やプレゼンテーションの方法に工夫を盛り込みながら、学生が自分から積極的に取り組めるような授業方式を探っていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:准教授 氏名:立花明彦
対象科目:障害者福祉論(講義)、障害者の生活の理解Ⅰ(講義)、障害者の生活の理解Ⅱ(講義)、リハビリテーション(講義)、障害とコミュニケーション技法(演習)

I 授業の目標・工夫など

「障害者の実像についての正しい理解」と「障害者観の再構築」——担当している各科目の目標は、基本的にそれぞれ異なるが、コアとなる部分で共通するものがあり、この二つがそれである。これらを達成していくためには、学生の目を障害のある人々へ向けさせることが必要であり、次に障害をもつ人々の視点から社会の実態をみる、つまりは障害学的アプローチによるものの見方が求められる。そこで各授業では、障害者の実像を理解する一助として、時折テレビ番組から関連する内容があればこれを録画し、授業で用いた。また新聞には、障害者に関わる事件やニュースがしばしば掲載されるので、必要に応じて取り上げ、問題点を指摘したり、解説したりもした。そのうえで、学生から意見や感想を書いてもらい、それを翌週の授業で紹介し、教員がコメントもした。さらには、3回目となるが、重度の心身障害をもつ児童とその親をゲストスピーカーに迎え、日々の生活やそこでの課題等を伺い、重度心身障害児への理解を得る機会を設けた。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

各科目の評価結果は、それぞれの項目ともに例年とほぼ類似し、学科平均値を上回った。ここでは、特に「障害者福祉論」の結果について述べる。

社会福祉専攻の学生に開講しているこの科目は、社会福祉士の資格を目指す学生には必修であるが、保育士を目指す者には選択科目となっている。そのためか、受講者数は「最小限の科目の履修しかない」とする最近の学生の傾向の影響を受けて減少気味にあり、今年度は35名で、これまでの最少となった。それ故、一部の者には必修ではあるが、全体的には学ぶ意欲のある学生が履修したと理解しているし、それがアンケート結果の数値にも表れていると推測される。実際、「授業を受けてこの分野の興味・関心が増した」は4.57(SD0.60)で、教員としては嬉しい限りである。また、「あなたの取り組み方」も4.37と学科平均を0.3ポイント下回ってはいるが、演習系の授業が多い中で講義系の科目としては健闘したと解釈している。

授業では、ノーマライゼーション社会実現への方策の一つとして進められているユニバーサルデザイン、バリアフリー化の現状についても触れるが、そのときは身近なユニバーサルデザインの商品を提示しながら、従来それが抱えていた障壁や、除去するための配慮点を学生と考えたりもする。アンケート結果の自由記述欄や「授業でよかった点」には、「バリアフリーの物を見せてもらった」の声に代表されるように、このときの授業を印象に残った内容として多くの学生が挙げている。

障害者に関連した新聞記事の紹介と解説についても、「ときどきある新聞に対してのコメントがもしよかった」「最近あったことなどを取り上げていて、わかりやすかった」「授業を通して知ったニュースもたくさんあった」など、評価する意見が複数寄せられ、学生の問題意識を喚起する一助になったと理解している。さらには、その日の感想等を書いて提出してもらうことについては、「小レポートを通し、自分の意見や考えを発信できて良かった」「意見や感想がフィードバックされ良かった」といった意見が複数寄せられた。これらは、従来から行なっているものであり、決して目新しい取り組みではないが、これまでの筆者の実践が評価されているものと受け止め、さらなる向上を図っていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:講師 氏名:木林身江子
対象科目:身体のおくみⅠ(講義)、介護過程Ⅰ(講義)、医療的ケアⅠ(講義)、
医療的ケアⅡ(講義・演習)、医療的ケアⅢ(講義・演習)

Ⅰ.授業の目標・工夫など

「身体のおくみⅠ」では、根拠に基づいた質の高い介護を実践する能力を養うため、身体構造・おくみが一つひとつの日常生活行動と結びついているということを理解することが目標である。授業はテキストを中心行い、必要に応じて補足資料を追加した。また、ミニテストを数回実施し、各章が終了したところでテキスト内の章末テストに取り組む時間を設け理解の定着を図った。

「介護過程Ⅰ」は、内部障害のうち心臓、呼吸器、腎臓、膀胱・直腸の機能障害と、それらに加えて糖尿病について取り上げている。Ⅰ領域に3コマ使用し、「身体のおくみと働き」、「主な疾患と生活支援・介護」を説明し、「事例をもとに介護過程を展開」することで、医学的知識に基づいた介護実践能力を養うことを目指している。今年度もレジュメの改善に努め、各領域の講義終了時には「感想・質問用紙」を配布し、次の授業冒頭で回答する時間を設け対応した。

「医療的ケアⅠ」は、医療的ケアの基礎知識を学習する講義科目である。医療的ケアを必要とする利用者やその家族と関わるうえで、倫理的な思考や対応能力を高めるため、映像等で事例を提示し、その後グループワークを実施し、意見交換の機会を作った。また、テキストを活用して各章のまとめを行い、知識の確認を行った。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」は、経管栄養、喀痰吸引の技術演習が主な内容である。医学的知識、手順と根拠が理解できるよう、テキストの他、パワーポイントやDVD等、視聴覚教材を活用した。また、経管栄養、喀痰吸引の演習のほか、用手微振動やポジショニングなど関連する技術演習も取り入れた。学生は技術試験にも意欲的に取り組み、全員に「医療的ケア基本研修」の修了証を発行することができた。

Ⅱ.授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「身体のおくみⅠ」は、テキストに沿った授業展開や補足資料の説明が好評価であった。今後はDVDなどの視覚教材うまく活用してより分かりやすく、楽しみながら知識の定着を図っていききたい。また、感想・質問用紙を配布するなどして、教員から積極的に学生の疑問を汲み上げるよう努めていききたい。

「介護過程Ⅰ」については、感想・質問用紙を配布することで、学生の理解度や質問を把握することができた。そして、それらに対し丁寧に回答することで授業の質向上にもつながったと思われる。また、授業の中で学生たちが介護過程を展開する時間をとり、その場で解説まで行うことで理解の深まりにつながっていると思われる。しかし、学生の理解度には個人差が大きく、次年度は配布資料の改善やDVD等も活用しながら、学生の興味・関心を引き上げ、それぞれの学力に沿った授業展開を心がけていきたい。

「医療的ケアⅠ」は、前半は、特に倫理に関するテーマについて、日常的なケアの場面から起きている問題や介護福祉士として必要な視点・思考・対応、終末期の医療的処置について、グループワークを通じて学生に考えてもらった。後半は、主に喀痰吸引の基礎の講義を行った。学生の中には、医療系科目に苦手意識(難しい、自分とはあまり関係ない等)があるように見受けられ

る学生もあり、今後はミニテスト等で必要な知識の定着を図るとともに、パワーポイントやDVDを活用しながら、この分野への興味・関心を高めていきたいと考える。

「医療的ケアⅡ・Ⅲ」では、講義・演習の他、神経医療センター、介護老人保健施設、有料老人ホームの協力を得て、医療的ケアの見学実習も取り入れた。実際の患者(利用者)に看護師が行っている医療的ケア場面を見学することで、準備から実施手順・留意点を具体的に学ぶことができたことは、理解の深まりに非常に有効であった。今後は、エンド・オブ・ライフケアや誤嚥を防ぐポジショニングなどの視点も含め、経管栄養、喀痰吸引が必要な人の生活をイメージしたケアも含めて教育を充実させていきたい。

学科・専攻:社会福祉学科介護福祉専攻 職名:講師 氏名:鈴木俊文
対象科目:基礎介護技術(演習)、発展介護技術(演習)、介護過程C(演習)、発展介護過程(演習) 介護福祉論(講義)、介護概論・介護技術(講義・演習) 福祉経営とリーダーシップ(講義)

I 授業の目標・工夫した点

当該年度は、昨年度「基礎」「応用」「発展」の3体系によって新たに編成した介護技術系科目に力を入れて取り組んだ。この内、筆者が科目担当主任として担当している基礎介護技術、発展介護技術は、講義と演習を組み合わせた複数教員で担当する演習科目である。これまでに課題となっていたことは、介護技術の評価視点であり、当該年度は科目担当間での議論を重ね、現場実践としての技術評価の視点を教育評価に盛り込むべく、演習時に用いるチェックシートの項目の見直しと改善をはかった。また、「福祉経営とリーダーシップ」科目を担当し3年目を迎えた。本科目は実務家の非常勤講師と分担し「福祉経営論」と「リーダーシップ論」を学ぶものであり、これまでリーダーシップ意識の低い学生に対し、これを育むための演習教材の開発に苦慮していた。当該年度は、この課題に対応すべく、介護実習の実習指導内容と関連させたケースメソッド開発に取り組んだ。この教材開発は教育特別研究活動の成果も盛り込みつつ教材開発及び教育デザインの検討を進めた。その他、社会福祉専攻(介護福祉論、保育実践演習)、歯科衛生学科(介護概論・介護技術、社会福祉論)等他学科の授業においては、今年度も介護技術に関心の高い受講者が多くいたために、事前に授業内容と進捗についてアンケート調査を行い、介護技術(生活支援技術)を軸にした教育実践に力を入れるほか、医療・保健・福祉の協働視点である「地域福祉計画・地域福祉活動計画」に関わる静岡市の事例を活用しながら、介護福祉にかかわる地域課題を積極的に取り入れた授業を行った。

II 自己評価と今後の課題

各評価項目の全体的な評価は昨年度と類似している。自由記述ではグループワークをとおした気づきや学びに関する評価が高く表れた傾向にある。特に介護福祉論や介護概論・介護技術等は、グループワーク時の教員の助言についての記述が多くみられ、これらが「新たに考えたり学んだりすることの多い内容であった(いずれの科目も4点以上)」が高評価である理由として関連が強いものと考えている。筆者の担当科目は、いずれもグループワークを数多く盛り込み、問題提起から対話へ発展させる変容的な学習過程の促しに力点をおいている。グループワークで採用した課題は、いずれも教員特別研究や受託研究等の研究活動によって事例教材(ケース教材)を作成したものであり、このようなリアリティのある事例教材、事例を活用した教育方法に一定の評価が得られていることから、今後もケース教材の開発は、教育活動(授業)の重要な研究活動のひとつとして取り組んでいきたい。一方で、福祉経営とリーダーシップにおいては、「授業の内容はよく理解できた」の評価が4,02と他の評価に比べ低い傾向にあった。そのため、学びと理解度との関連性を分析し、より質の高い授業になるよう更なる改善を加えていきたい。

学科:社会福祉学科 職名:講師 氏名:濱口晋

対象科目:コミュニケーションⅠ(講義)、コミュニケーションⅡ(講義)、介護過程C(演習)、
介護実習指導Ⅰ(演習)、介護福祉演習(演習)

I 授業の目標・工夫など

「コミュニケーションⅠⅡ」及び「介護過程C」授業の目的は以下の通りである。「コミュニケーションⅠ」で介護におけるコミュニケーションの基本を学習する。「コミュニケーションⅡ」ではコミュニケーション障害がある利用者とのコミュニケーションの技法の基本を身につける。「介護過程C」では、聴覚・言語障害のある利用者への介護過程の展開方法について説明できる。これら3科目を、コミュニケーション技術の基礎・応用・発展とそれぞれ位置づけて、段階的に授業を計画し実施した。

今年度も、特別養護老人ホーム等高齢者施設や障害者支援施設等障害者施設等で介護福祉実践する上で、役立つように、失語症等の言語障害や老人性難聴等の聴覚障害について重点的に取り上げた。工夫した点は、授業の中に演習を多く取り入れた。多種多様なコミュニケーション障害を理解し、障害に応じたコミュニケーションの技法を実際にわかることができるよう、授業の中でDVD等の視聴覚教材を使用した。また、単に視聴するだけでなく、障害を持つ利用者の状態を各自が考え、判断し、適切なコミュニケーション技法を選択し、実施していくという演習を行った。さらに、読話で実際に言葉を読み取る練習や透明文字盤をグループで製作し、ロールプレイをした結果を発表する演習も行った。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

「コミュニケーションⅠ」について

(I 授業のあり方 平均 3.98 範囲 3.72～4.23)「(2)授業は計画的に展開されていた」は、4.02であったが、昨年度と変わらなかった。過去には、「授業時間の終了時間が遅い」という意見もあり、授業の時間配分等にはより一層気を付けていきたい。

(II 教え方 平均 3.94 範囲 3.80～4.22)(III 総合評価 平均 3.98 範囲 3.91～4.09)

「(6)教員は、学生の理解度に配慮して授業を進めていた」・「(9)教員は、学生に対して誠実に対応していた」の項目が低かった。一方、「(7)教員の授業に対する熱意が感じられた」の項目は評価が低くなかった。『解説が丁寧でした』、『とても説明がわかりやすかった』、『プリントで授業を進めることが多かったので、分かりやすかった』等の肯定的な意見もみられたが、『マイクの声が聞こえにくい』や、毎年『板書を丁寧にしてほしい』や『字が読みにくい』という意見もあり、学生の理解の妨げとなっており、丁寧に説明していきたい。今年度も授業内容の構成や流れが学ぶ側にとって、適切なものではなかったものと受け止めている。授業を計画的に展開し、学習者の理解度に応じて、修正し、双方向の授業ができるように改善していきたい。「(7)教員の授業に対する熱意が感じられた」は 4.11 で低くはないので、その「熱意」が学習者の学びの形成にもっと役立つようにしていきたい。

後期の「コミュニケーションⅡ」については、前期の「コミュニケーションⅠ」に比べ概ね評価が改善した。(I 授業のあり方 平均 3.98→4.34)(II 教え方 平均 3.94→4.29)(III 総合評価 平均 3.98→4.23)

「介護過程C」については、4.00～4.35と高くはないが、過去の評価 3.79～3.94 に比べ、若干高

くなっている。「コミュニケーションⅡ」を応用発展した演習を実施したが、授業内容も重複し、学生にねらいで意図したことが十分に教授できなかつたので、授業内容を再検討していきたい。

「介護実習指導Ⅰ」については、評価全体において、4.20～4.35 であり、昨年度(3.72～3.93)と比較し、改善した。これは、一昨年、介護実習ⅠBにおける実習施設や内容を見直し、変更したため、昨年度は十分な実習指導につながらなかった。今年度は2年目を迎え、一定の改善がみられたので、3年目に向け、更に改善していきたい。

「介護福祉演習」については、評価全体において、3.68～4.02 であり、昨年に比べ評価が若干低下した。オムニバス形式の授業であるため、各コマを担当する教員と時間や内容等の事前の打ち合わせをしっかり行い、終了後教員同士で振り返ることをしていきたい。平成29年度には介護福祉士国家試験が導入されるため、学生が自主的に継続して勉強できるような工夫を考え、実施していきたい。

学科名： 社会福祉学科 職名： 非常勤講師 氏名： 飯塚哲男
対象科目： ソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ （平成27年度 F D教員コメント）

I、授業の目標・工夫など

『 目標 』

社会福祉専門職（主として保育士、社会福祉士など）を目指し、社会福祉援助技術の学びと気づきが深まりソーシャルワークの現場で発揮できるよう以下①～③に目標を設定した。

- ① 自らの価値・倫理に向き合い、他者への共感力への気づきを意識した、自己覚知ができる。
- ② 社会福祉実習とリンクさせて利用者に共感できるマインド・スキル・テクニックについて

気づき、考察しながらコミュニケーションの姿勢・行動を学ぶことができる。

- ③事例・事例研究より相談援助援助（インテーク・アセスメントなど）過程を学び、聴く力・説明する力・質問する力を養い・チームアプローチをイメージしていく。

『 工夫 』

授業目的、目標を毎回明示し、テーマに沿った基礎的な導入説明を行った。

テーマに沿ったレジメ、パワーポイント、DVD等の教材を提供できた。

グループワークにて援助過程を考察できるよう高齢者、障害者、児童などの事例検討・研究を行った。学生自身からのコメントが引き出せるよう、積極的にアイスブレイキングを導入し、グループ内・外での意見交換・共有・生徒の発表、報告の場を設定した。

また、共感力が高まる、身近な生活課題事例を用い、ロールプレイを行った。教員として、生徒への共感と傾聴を基本として、コメントを行うように意識した。生徒一人一人の演習ごとに振り返り効果を高めるために振り返り用紙記入を実施し、出来事を描写する力、考察する力を言語化できる力が高まるように配慮した。

学生一人ひとりの振り返り用紙へ毎回コメントを記入し、個人スーパービジョンを行った。（演習中に言葉で表現できなかったこと。疑問点等をコメントしてもらい、教員として、スーパービジョンの支持・教育的機能として生徒との個人スーパービジョンのツールとして活用できた。管理的機能として、学生の演習理解度の参考として進捗状況に反映できた。）

II 授業についての自己評価と今後の改善点・工夫

演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ学生アンケートでは、『Ⅰ授業のあり方』・『Ⅱ教え方』・『Ⅲ総合評価』項目『十行の計画的な展開』・『教員の授業に対する熱意・誠意』・『教員は学生の理解が深まるように授業を工夫していた』・『この授業は、新たに考えたり学んだりすることの多い内容だった』は、平均4.8以上だった。アンケート自由記載欄、振り返り用紙では、「実践が多くて、とても分かりやすい。」「それぞれの内にひめた思いや意見に、気づかせてくれた。」「ただ自分で考えるのではなくグループになって実践することで楽しく授業に取り組めた」「実際の状況取り組みの況と想定しながら」等のコメントをいただき、学生同士、学生と教員等、双方向

のコミュニケーションでの演習進行できた事に感謝したい。

改善点は、『Ⅳあなたの取り組み方』・『疑問点を必要に応じて教員に質問した』の欄で評価点が平均 4.3 前後と他の項目と比べ学生の可能性を引き出す教育的機能が不十分だった。教員として教育的機能を大切に学生自身の意見や意思が尊重、発揮できる場づくり、自己覚知・共感できる力、質問できる力を支援する分かり易い説明、振り返り用紙の活用を行う。ソーシャルワーク演習は、通年 2 年、教員 4 名で取り組んでいる。更なる教員同士の連携・協働によって学生へのスーパービジョン効果が高まるよう努めます。以上。

非常勤講師 氏名：石野育子

対象科目：認知症の理解Ⅱ（講義）、発展介護過程（演習）、介護実習指導Ⅱ（講義）、介護実習ⅡA（実習）

I 授業の目標・工夫など

非常勤講師として授業を行った。昨年と同様、自作の製本テキスト（認知症の介護Ⅱ」、「介護過程2」、「介護過程展開の手引き」）と市販のテキストの両方を活用した。また今年も、学生に授業の感想や質問を振り返りシートに記入してもらった。学生の意見に対し教員がコメントを記入し、次の授業の前に返却した。学生からの自発的な質問は少ないので、紙面を使ったコミュニケーションを20年以上続けてきた。1枚の用紙に15回分の意見を書けるようにしているので、個々の学生を理解できると同時に学生の成長と変化を確認することができた。また、授業への率直な意見を次の授業に役立てることができた。

「認知症の理解Ⅱ」の目標は、認知症がある方の生活特性とそれに対する介護を取り上げ、認知症を正しく理解することによって偏見や誤解を取り除くことを目標とした。まだ介護に触れたことのない1年前期の学生であるので、より具体的な例を示すことに努め、自分や卒業生の経験談やDVDを多用して理解を助けた。

「発展介護過程」は今年から科目名が変更した。2年生の通年科目で、実践的な介護過程の展開を学ぶことと同時に、ケアカンファレンスの運営の習得を目標とした。3回の介護実習で担当した利用者の事例を使って、講義とカンファレンスによって授業を進めた。実際の事例を扱うため、事前に利用者として職員に対して学習のために情報を活用することについて了解を得て、施設長に対しては個人情報を守ることについて誓約書を提出した。事例の作成においては個人が特定されないように一部加工した。

平成21年からケアカンファレンスの各グループに教員を配置し、学生がケアカンファレンスを運営することを助けた。座席の取り方、司会者・発表者・書記・メンバーの役割と進行方法の具体例を事前に講義した。発表者の介護過程へのコメントやカンファレンスの書記記録は全て、発表者に還元するしくみを作った。発表者はメンバーのコメントを参考にして、自分の介護過程を修正し、修正後の介護過程について自己評価表でチェックして、次回の実習での課題を明確にするように指導した。

II 授業についての自己評価

平均点を昨年と比べると、授業のあり方「認知症の理解Ⅱ」（4.47→4.49）、「発展介護過程」（4.35→4.15）、総合評価は「認知症の理解Ⅱ」（4.48→4.56）、「発展介護過程」（4.20→4.06）だった。自由記述においては、「認知症の理解Ⅱ」で40人が肯定的な意見を書いており、自作のテキスト、振り返りシートのコメント、DVDの選択について、わかりやすいといった評価をしていた。しかし「発展介護過程」では充実した授業だったと4人記述しているのみで、最終的な介護過程の完成度においても個人差が大きかった。学生個々に合わせた指導を充実する必要があった。

非常勤講師 氏名 岡村由紀子
対象科目 障がい児保育

理論を実際の保育場面や子どもの現れをくぐって分かり易く授業を創っています。そのことが、学生さんに教科への関心を持って参加してくださっているのかな？と思います。又、学生たちの授業への疑問や考えたことを知るため、授業の終わりに「授業カード」を記入してもらっています。

これは、分かったことを書くと言うより授業を通じて自分は何を考えてか？を記入してもらい、次回の授業づくりに参考にしています。

現場は、常に変わる子ども達の姿から真の願いをくみ取る力が求められています。言われた事知ったことだけを行うだけでなく「自分はどうか考えるか？」がいつも問われる仕事であることから、学生の思考力を上げることが専門性を高めるためには、必要だからです。

あまり発言をしないことが多いですが、授業終了後の質問やカードにかかれている内容から学生の思考力が上がっていくのが、1年間を見ているとよく感じる事が出来ます。

これからもそうしたことは、丁寧に授業で取り組んでいきたいと思っています。

非常勤講師：川口 充

対象科目：歯科薬理学（講義）

1) 授業アンケートの集計結果：(1) 授業のあり方：「授業の目的のわかりやすさ」と「適切な課題の賦与」は、多くの学生が到達目標と授業内容が適切であったと感じている。しかし「難易度」は7割の学生が理解し、3割の学生が不十分だった。学生の基礎知識量の差に起因している。専門用語や慣用語句の不慣れ、生物・物理・化学の知識不足により、理解から遠のいた可能性も否めない。「授業展開の計画性」は大きく分れた。原因はシラバス通りに進行しなかったことがあったためである。時間に対する項目数のバランスを改善する必要がある。(2) 教え方：教師の態度（熱意、工夫、対応）は評価が高かった。しかし、「授業量と進度」、「理解度に対する配慮」は大きく分れた。項目配分の工夫が求められる。(3) 総合評価：「新たに考え、学べる内容」の評価が高く否定意見が皆無だった。ほとんどの学生が内容の新鮮さ、専門性の高さを感じた。「理解の満足度」は肯定と否定に分れた。理解力の差が推察され授業の工夫が求められる。「興味・関心の増加」は意見が分かれた。歯科での薬物療法の重要性に対する実感が湧かない現状での意識の差と推察される。(4) 学生の授業に対する積極性：「出席への意識」、「理解する努力」、「意欲的な授業参加」は評価が高い。「疑問への質問」は分れた。

2) 自由コメントに対するコメント：「前期の薬理の方が解り易い」、「解り難くつまらない」は、具体性を欠き適切なコメントを返すのは難しい。今後の改善・工夫を実行し様子を見る。

3) 授業の工夫：教科書を基本とし、要点を説明する。説明には板書、スライド、それに対応したプリントを用いる。プリントには記述欄を設けメモが取れるように配慮する。スライドの量は8枚前後、黒板に書けない図を中心とする。板書が基本である。板書は、視る、聴くだけでなく筆記作業により集中力が増し、知識が整理される。

4) 授業についての自己評価と今後の改善・工夫：全般的に平均値より若干低位だが、各評価項目に極端な差がなく、安定した評価である。しかし、その中で、改善すべき課題が散見される。

今後の改善・工夫：1) 毎回知識の整理のためにポストテストを行う。2) 授業の進行とシラバスが合うように調整する。3) 時間外の質問はメールを用い、簡単なものは返信し、複雑なものは次回の講義に回答を用意する。4) 不慣れな言葉、表現、術語は、資料プリントを作成する。5) 実習に代わる視聴覚教材を用いて具体的なイメージを示し、抽象的な講義をカバーする。

5) 学生に期待すること・学生への要望：薬物の知識は患者だけでなく、自身の生活に役立つ。歯科で扱う薬物は限られるが、身近で使う薬物は大きく広がっている。自身、家族、将来の子供のために使うことを考えたら、無知ではいられない。非常に多くの薬物全てを知る必要はないが、歯科用の薬物だけで良いと考えるのは適当でない。他科で薬物を処方されている患者の生理状態を知らずに処置は行えない。一方、患者の要望に応えなければならない。このジレンマから脱けるのに薬理学の知識は有利な道具になる。薬理学は薬物の体内での変化と、体の反応を解く学問だ。この仕組みから様々な薬物の作用を理解していく。薬理学の授業が核となり生涯学習の中で知識を膨らまして欲しい。考え、判断し、行動するプロフェッショナルに成長することを望む。

非常勤講師 川瀬俊夫
対象科目：歯科衛生行政学

I 授業の目標・工夫など

歯科衛生行政学は「歯科衛生行政の目的や組織、法制度などの基礎的知識を修得し、歯科衛生士として業務を適正に実施するために必要な法規について理解する」を目標としている。現在では歯科衛生士は保健衛生活動の専門職として確立しつつある。歯科医学の発展と他（多）職種との連携が医療現場で日常の業務として、歯科衛生士の適切な対応が求められている。また、歯科衛生学の基礎知識・技能ばかりでなく、歯科衛生学は「歯科衛生士が歯科疾患の予防処置、歯科診療の予防処置および歯科保健指導を中心とした歯科衛生業務を専門職として実施するための理論的・実践的根拠となる学問体系である」との認識が重要である。歯科衛生士の業務を行うにあたり「歯科衛生士法」にはじまり、「健康増進法」から「歯科口腔保健の推進に関する法律」に至る多くの法令を理解することが求められている。

教科書として末高武彦著の「歯科衛生士のための衛生行政・社会福祉・社会保険」を用いているが、歯科衛生士の教科書としては他にはない単著者であることから統一性のある教科書である。そのため、授業では教科書に沿った進め方をし、教科書内の重要な点をスライドに示し、補足が必要な最新の疫学調査等の資料についてはプリントを作成している。

また、要所要所において過去の国家試験問題を演習問題として示し、理解を深めている。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

教科書の項目に沿った内容でシラバスを作成し、授業を行ってみた。歯科衛生士法を含めて衛生関係法、保健医療の動向を統計調査として、授業を進めた。しかし8回でまとめるには、保健医療の動向に十分時間をかけることができなかった。また、「歯科衛生行政学」は必ずしも学生にとって興味のある科目とは思われない。学生に興味を持ってもらう工夫が必要である。そのためには、歯科衛生学と疫学調査の情報を明確に示す必要がある。したがって、今後の改善としては歯科衛生行政を教科書に沿った進め方と、歯科衛生士の業務を中心とした歯科衛生行政学の授業とし、全体としてバランスのとれた授業の進め方にすべきと考えた。

また、国家試験の過去問題には興味を示しているので、今後充実した演習問題を組んでみる工夫を考えている。

学科：社会福祉学科 職名：非常勤講師 氏名：木俣創志
対象科目：保育表現技術Ⅰ（造形）（演習） 保育表現技術Ⅱ（造形）（演習）
介護レクリエーションⅢ（演習）

I 授業の目標・工夫など

授業の共通の目的は、(保育や介護に役立つ)専門的・実践的な造形技術と教養を学ぶこと、美術に対する不要な苦手意識を取り除くこと、です。この両方をクリアするのに必要かつ十分な条件は、「美術・造形」を心から面白いと感じることです。

何故、私たちは「つくり、えがく」のか。造形制作の技術的な事柄やHow toが現代のインターネットやTV、書籍などのメディアに溢れ、それらを誰もが容易に入手出来る世の中であればある程、その問いに対する答が伝わりにくくなっています。この答は、実践によってのみ気づき理解し身につくことであり、この根っこの部分をしっかり学ぶことこそ、美術の授業という「現場」の本質的な目的と考えます。「つくること・かくこと」が得意な人も、あるいは小中高で苦手意識を抱えてしまった人も、心からの面白さを体験し、それを記憶にとどめ、公教育や生涯学習にプログラムされている目的や意義を素朴に実感出来るよう、さらに指導現場での実践力に繋がるよう授業を組み立てています。

具体的な目標は、以下の通りです。

1. 「つくること・かくこと」を好きになること
 2. 指導現場での(美術・造形に関する)即戦力・実践力を身につけること
 3. 独創的な発想に興味を持ち、これを育むこと
 4. 私自身も学生たちから何かを学べるような授業の雰囲気・体制をつくっていくこと
- (以上は昨年と同じです)

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

毎年の授業の変わらぬ点は上に述べた通りですが、今年度いつもと異なった点は、カリキュラム改編により「介護レクリエーションⅢ」（前期）の日数が15コマから8コマに減少したことです。結果、造形の基礎トレーニングに終始した感はありましたが、辛うじて例年同様の充実した授業展開が出来たと感じています。このことは、本授業のアンケート結果、「とても学ぶことの多い授業」、「いっそ必須科目にしても良い授業だと思う」などのコメントの他、「後期も授業をしてほしいくらい」（以上原文）といった授業の拡大を求める意見が10件にのぼった（全16名）ことにも表れていると思われます。

また「実習前にあれば、レク実施に利用できたので、早くやりたかった」との意見もあり、検討材料だと思います。

今年は延べ70名を担当しました。例年と同様、アンケートの自由記述欄には多くのコメントが寄せられました。

授業のプラス評価として最も多かったのは「楽しく(面白く)制作できた(授業を受けられた)」(42件)、次いで「自由に創作(表現)できた」(14件)、「将来の指導(実践、実習)に役立つ授業だった」(11件)、「美術(造形)は苦手だったが、楽しくできた(できることがわかった、興味がでた、自信をもってできるようになった)」(8件)などのコメントが多く見られました。

とくに印象的な意見は、「毎回、造形の時間がたのしみでしようがありませんでした。こ

のたのしさを子どもに伝えられるようがんばります。」「面白い発想や新しい見地を知ることができた。」「熱意と面白さを持って行ってくださって良かった。」「毎時間充実していた。」「作品1つに取り組むのではなく、幅広く美術を学ぶことができた。」「自分で考えて作るという過程が多かったため、そういったことが苦手であったのが少し改善できた。」「おり紙などの身近なものでもとても楽しめることが分かりました。」「自由にさせてもらえて作品を通して自分の自己についてみつめなおすことが出来た。」(以上原文)などです

他、同様の意見が多数あり、授業の主旨が学生さんに正確に伝えられているものと嬉しく思いました。

一方、授業への改善点・希望のコメントは、昨年と同様、造形授業の拡大を求める意見が最多でした(10件)。日数が縮小された「介護レクリエーションⅢ」での要望が多かったことは既に触れましたが、他の授業においても口頭で常にそうした希望が多数あります。科としてのカリキュラム・コンセプトを、明確に事前アナウンスしてよい時期かもしれません。

設問によるアンケート結果(数値結果)は、概ね満足できるものでした。(3科目の数値結果を「授業のあり方」「教え方」「総合評価」「あなたの取り組み」の順に平均で示すと、「保育表現技術Ⅰ(造形)」…4.8、4.8、4.6、4.6、「保育表現技術Ⅱ(造形)」…4.8、4.9、4.9、4.9、「介護レクリエーションⅢ」…4.7、4.7、4.9、4.6)

Ⅲ 19年間を振り返って

さて、開学以来19年間にわたり美術の授業を担当し、この「アンケート・コメント」を書く機会も最後となりました。

パソコン世代の学生さんにとって、ウェブ情報は私たち教員が考える以上に身近な情報源です。そこで、ここ数年、私はこの「コメント」を(学生さんと教員との)貴重なコミュニケーション・ツールとして捉え、生きたメッセージを届けるべく心がけてきました。(以下、学生さんへのメッセージです)

人は、ものをつくる楽しい思い出でいっぱいに満たされれば、そこから溢れ出る思いを人と分かち合おうとするものです。なぜ、そう考えるようになったか――

街に子どもたちの声がいつも聞こえていた昭和40～50年代、私は、幼少期から小中時代を通じ、父母の運営する造形教室・美術研究所に毎日のように入り浸りですごしました。近隣の友人たちと無心に制作出来たこの環境は、美術を生業として「つくること・かくこと」の喜びを伝えたいと願っている今の私にはかけがえの無い財産となりました。

本学での教育活動のベースはこのとき既に出来上がっていたようで、私が夢中で取り組んできた様々な造形活動から、授業や個々の学生さんに相応しいテーマを選び、考案する仕事はじつに楽しいものでした。

美術的スキルや知識は勿論ですが、何より「つくること・かくこと」の魅力を伝えることを最大の使命としてきた理由は、美術には、どんなに苦手意識を持ってしまった人にも必ず楽しめる課題があり、それを契機として再び美術への興味を大きく取り戻すといったことが少なくないからです。またそれが身近な素材で体験出来る場合も多く、それを発見する行為自体が、たいへん美術的な営みであることも多々あります。私がことさら教科書を使用しない理由もそこにあります。(詳しくは『美』194-196号、拙論をお読み下さい)

とくに懐かしい思い出は、専任の先生からの依頼でゼミの課題『盲児のための絵本づく

り』をお手伝いしことでしょうか。このときは、実際に盲学校で美術教師をしている友人たちと連絡をとって現場の声を参考にもしましたが、とにかく学生さんには先ず、自由な発想で自分の希望や夢に挑戦してほしいと思います。そして、独自のアイディアや理想を現実とすり合わせるプロセスにも虚心坦懐に臨んでほしいのです。（それこそまさしく、クリエイティブな営みに他なりません。）

教室では、ときに造形テーマを突っ込んで掘り下げました。「アート」の目的や、（震災後に）「非常事態におけるアートの役割」といった深いテーマについて話し合いの場を持ったことなど、たいへん印象に残っています。

学生さんにはなるべく“本物”に接し、アートの魅力をダイレクトに感じてほしい、という思いが常にありました。私は単なる媒介者に過ぎず、そうした考え自体を私は教室で学生さんに伝えます。そのためには、いわゆる“お仕着せ”の制作ばかりでなく、独自の創意とそれを羽ばたかせるための自由が保障されなければなりません。大学での造形授業の基本は、そこにあると考えています。

科目として存在するから美術をするのではなく、なぜ人間にとって美術が必要か。その答を実感することが、指導現場に立ったときに力を発揮します。決して「子ども騙し」や「高齢者騙し」に逸せず、また単なる知識や技術の伝達でもない“美術の本質”を、今後出会う人々とともに分かち合ってもらえればと切に願っています。

最後になりますが、長いあいだ、授業のアシストを担当して下さった天野ゆかり先生には、心より感謝申し上げます。学生さんにも私にも常に同じ姿勢で接して下さり、仕事をしやすい環境に配慮して頂いたばかりでなく、たいへん多くのことを学ばせて頂きました。造形の授業が一定の評価を得ていたとすれば、それはひとえに天野先生の力によるものです。

非常勤講師 氏名：金美連
対象科目：国際関係論（講義）

I 授業の目的・工夫など

本講義では、国際関係の歴史と現状を良く理解することを目的とした。前半では、第二次世界大戦以後の国際関係の構造、その変容過程を歴史的に概観した。後半では、国際社会における主要問題である環境汚染や、南北問題、民族紛争、人種差別といったテーマを取り上げた。

高校で世界史を履修しなかった学生たちを考慮し、国際関係の歴史と現状を幅広く取り上げながらも、分かりやすく教えようと心がけた。また授業への理解を深めるために、毎回プリントを配り、スライドやビデオを活用しながら授業を進めた。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

アンケート調査による評価は、セクションⅠ「授業のあり方」、セクションⅡ「教え方」、セクションⅢ「総合評価」、セクションⅣ「あなたの取り組み方」とも平均点を上回る結果であった。今まで受講生の大半を占めていた看護学科の学生がいなくなり、受講生が少ない中での調査だったので、かなり高い評価を得ることができたと推察される。

今年度からは 2 年生の授業に変更され、受講生が多く減少してしまった。そのため、当初予定していた発表は取り止め、学生たちとの意見交換を心掛けながら授業を進めていった。社会人と歯科衛生学科の学生数人も聴講生として参加しており、皆の様々な見解を聞くことができたのはよかったと思う。自由記述欄でも「説明や映像でわかりやすかった。」、「自分の意見を言えたのでよかった。」という意見があった。

ただ、「自分は、疑問点を必要に応じて教員に質問した。」という項目の評価は高くない。学生が自由に質問できる雰囲気の助成にはより工夫が必要だと思われる。来年度は学生とのコミュニケーションを重視し、学生の積極的な発言を促しながらより活気ある授業にしていきたいと考える。

非常勤講師 氏名：久保幸恵

対象科目：社会調査の基礎（講義）

一昨年度の授業評価アンケートの結果を受けて、昨年度は以下のような工夫をした。

- ① 統計学に基づいた計算問題の紹介を必要最小限に抑えた。一昨年度は「この授業の内容は良く理解できた」という項目の評価が低かったため、文系の学生になじみがない計算式は数個しか説明しなかった。
- ② 一昨年のアンケートでは、「先生のプライベートの話をもっと聞きたかったです」という意見があったので、昨年度は、私個人の過去の社会調査の実体験などを交えながら授業を進めた。
- ③ 一昨年の自由記述欄に、「講義中の声が上手く聞きとれなかった」との指摘があったので、昨年度はマイクを用いて講義をした。

以上の工夫をして授業を行ったが、昨年度の評価では依然として「授業の目的、目標から見て、授業の難易度は適切であった」という項目の評価が低い。また自由記述欄にも、「難しいところは本当に難しくてよく分からなかった」という回答があった。難しいテーマである「検定」は大まかなことだけを説明し、計算問題も少なくしたのにも関わらず、学生さんたちは、依然として「難しい」と感じたようである。

恐らく、難しかったのは量的調査に関する説明だと思われる。量的調査の分類では、どうしても、統計学に基礎を置く計算式を説明せざるを得ない。したがって本年度からの工夫としては、計算式を紹介する時に、もっと基礎的なレベルから数式について説明すると同時に、具体例を増やして、計算式に馴染んでもらいたいと思う。

学生さんたちへの要望としては、「分からない」と思ったら、講義中に、どんどん自由に質問をしてもらいたい。一通り説明した後で、「何か質問は、ありますか？」と必ず尋ねるようにしているが、ここ数年間の講義では、質問が出たことがない。4, 5年前までは、積極的に発言する学生さんが数名いて、講義を引っ張っていく感じがあった。もっと積極的に発言してもらいたい。

そのためには、学生さんが声をあげやすい講義を作っていくことも必要であろう。この講義は、暗記をしなければいけない専門用語がたくさんあり、どうしても私から学生さんに話しかける、という一方通行の講義になりやすい。これまでの授業では、社会調査を行う準備を体験してもらうために、依頼状の作成と質問事項を考えてもらう、という作業をする時だけは、学生さんの意見を聞くことができた。双方向の意思疎通を実現するために、これらの作業に加えて、学生さんが参加できる、何らかの具体的な体験ができるような作業を増やすことを検討している。

非常勤講師 氏名：佐々木崇暉
対象科目：日本経済論（講義）

I 授業の目標・工夫など

経済学的な見方、考え方や経済的知識そのものに興味を持ってもらうことを授業の第一目標に置きました。経済学的な見方とは概念・理論・モデルといったメガネ（概念装置）をかけて経済現象を分析することです。講義の中で、重要な概念・モデル・理論を説明することに努めました。と同時に、それらの概念装置を絶対視するのではなく、それを通じて見えることと、逆に見えなくなることを理解することの重要性を指摘しました。また、経済学は社会認識の違いによって、異なった概念装置が存在します。したがって、一つの事象をみる場合も複数の概念装置で捉えることの重要性を強調しました。狙いは、複眼的思考を身につけてもらうことです。受講生は、当初戸惑いもありました（「何が正解か」という疑問）が、複眼的思考の大切さを理解してもらえたと思います。さらに、授業では経済データを読み解く能力を養うために、その読み方に力を入れて教授しました。しかし受講生のデータ読解力は十分に達成されたとは言えません。この点については、今後、さらに工夫していきたいと思います。

第二に、受講生の専門分野と関連付けて、日本経済の課題を考えさせる方法を取りました。

「社会保障・社会福祉で日本経済を再生できるか」というテーマで日本経済の課題を捉え、その解決策を提案しました。この点について受講生は、大いに興味を持ち沢山のコメントや質問を受講生からうけました。今後も、この点については、さらに力を注ぎたいと思います。

第三に、できるだけ双方向的な授業を運営するために、毎回「コメントシート」を配布し、感想や質問を書いてもらいました。とてもユニークな質問や感想があり、講義を進めていくうえで参考になりました。コメントシートに対するリプライは、次回の授業でプリントにして配布する方法をとりました。この方法は受講生に受け入れられたと思います。

II 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

今回の「授業評価アンケート」の結果をみると、「総合評価」について、前回より改善されたと思います。しかし、「授業内容は良く理解できた」という項目については低い評価結果でした。今後「興味を持つ」とことと「学力の向上」がつながるような工夫が必要であると思われます。

今後の授業の在り方については①新聞の経済記事やビデオを使って、より具体的なイメージを持てるような授業をこころがける、②受講生が専門にしている介護や社会福祉を経済問題と関連させながら理解させる、③経済データの読み解く能力を身に付けさせる、④受講生の疑問に基づいた対話形式の授業をこころがける、⑤理解度をチェックするミニテストや課題を課すこと、などによって授業改善に努める予定です。

非常勤講師 氏名：繁原幸子
対象科目：地域文化論

地域文化論の授業では静岡を中心とした地域の文化を近隣の県から、また日本全体、時にはアジア地域と比較することに主眼を置いている。

民俗学から物事を見るということがこの授業の基本なのだが高度成長期以前の話の多い民俗学をそのまま提示しても学生たちに理解させることは難しい。なるべく様々な項目で現在につながるような論を展開するよう心掛けてきた。

激しく変化している現在の様々な儀礼や行事、日々の生活、それらの中で何が変わり、何が変わっていないのか、学生たちに地域の文化を常に考えさせようとしてきた。しかし毎回一部の学生は大変興味を持ってくれるのだが、全体の学生に興味を持たせることはかなり工夫が必要となる。

今回の授業評価アンケートが学科・専攻の平均点とほぼ同じ点数にあったのは、今行っているやり方がそう間違った方向を向いていないのかと思いつつも、いつもながら学生全体の理解度を深めていく難しさを痛感している。

現在の学生たちの生活とはかけ離れた話も出てくるので、毎回パワーポイントやビデオを見せながら具体例を多く上げて説明しているのだが、次回もさらにより新しい事例を加えてわかりやすい授業になるよう心掛けたいと思った。

また毎回シラバスに上げた項目を確実にこなすのに時間をかけているので、その場で個々の学生からの質問を受けることは難しい。そのために毎回コメントシートに個々の質問を書かせ、次の授業の初めに、前回の授業の復習も兼ねて全体に向けて答えているのだが、このやりかたを評価した学生がいたので、次回もこの方式でいこうと思った。

非常勤講師 氏名：杉山弘卓

対象科目：福祉経営とリーダーシップ（講義）

I 授業の工夫

質の高いケアを提供するには、介護スタッフの個人レベルで介護技術が高ただけでは実現できません。それには介護スタッフが働く、広い意味での環境にも関心を持つ必要があります。例えば、事業所の掲げる理念や介護観、あるいは職場スタッフ同僚との人間関係。またスタッフの健康を守る事業所のセーフティネット等々組織の質がケアの質に関係しています。

この科目は、「福祉経営」「リーダーシップ」というキーワードを基に、組織の視点から、質の高いケアの実現を考えていきます。主に鈴木俊文先生が「リーダーシップ」について、杉山が「福祉経営」の観点から授業を展開しています。現場で起こりやすい問題場面の具体的な事例をグループディスカッションする事で、職場での介護職員の立ち位置がどうあるべきかを深めてきました。

II) 授業についての自己評価と今後の改善・工夫

授業評価アンケート集計結果を見まして、グループディスカッションによる事例検討方式によるテーマを深めていく方法は、「視野が広がった」等の自由記載コメントも含め概ね良かったと思います。

「教員は学生に対して誠実に対応していた（質問へのコメント対応、レポートへのコメント）」の設問回答が、他の設問に比して平均点が低くなっていました。授業中実施した小レポートへのコメント等に時間を作れず、次へ進行した点があったと振り返りました。その点については次年度は見直した授業を展開できるように準備したいと思います。

非常勤講師 氏名：高井 由美子

対象科目：身体のしくみⅡ・Ⅲ

授業評価アンケートについての報告書

授業の工夫

- ・ 医療に対する苦手意識が生まれないように、パワーポイントでの講義方式とし、視覚を通して印象に残るようにしてみました。
- ・ 前期では、高齢者に多い疾患の中で、生命に関わるもの、また専門職として基礎知識として知っていてほしいことが多かったため、模型等も使用し、実際に血管が固くなるとはどういうことなのか等イメージが付きやすいようにしてみました。
- ・ レジュメは、大切な部分を穴埋め式にして書き込むようにし、ボリュームの多い内容のポイントがわかるようにしてみました。
- ・ 後期では、疾患の症状や支援ポイントがわかりやすいように、DVD や動画を多く取り入れました。
- ・ 医療的な知識を得ることで、どのようにケア展開できるのかを現場の実際をおりませ、説明しました。
- ・ 健康、命、生活を守り、支えるということについて知識という側面からばかりでなく、ここで感じて考えてもらえるように、ドキュメント等の映像も使用しました。

授業についての自己評価

- ・ 前期においては、今年度が初の講義であったため、進行具合や学生へのフィードバックがうまくつかめなかったように思います。
- ・ 後期においても、時々進行が早くなっているときがあったように思います。
- ・ 解剖生理、各疾患の病態をわかりやすく説明していけるように努力します。
- ・ 映像を通して感じたり、考えたりする授業内容は有効であったと思います。
- ・ 自身の実践から学んだことを事例としてあげ、観察ポイントやケアへの結びつきを話すことは、学生にとってもわかりやすいということがわかりました。

今後の改善・工夫

- ・ 地声が大きいため、マイクの音量は下げるようにします。
- ・ 講義の進行スピードは確認していきたいと思います。
- ・ レジュメについては、穴うめで大切な部分ができるように今後も書き込み式にし、前年度をふまえて更に改善していきます。
- ・ 次年度から国家試験も踏まえて講義内容を組み立てていきたいと思います。

学生に期待すること

- ・ 1人でいくつもの基礎疾患をもつ高齢者にとって、心身の健康も含めて生活を支援していくことが大事です。日頃の状況を把握して今現在がどのような点に着目し、アセスメントし、ケアに結びつけることができるように、意識することが大切だと思います。安心できる暮らしへの支援のプロになっていってください。

非常勤講師 氏名:竹内政昭
対象科目:司法福祉(更生保護)

1 授業の目標・工夫

- ・限られた時間の中での授業ということもあり、要領良く進めるため、自らが編したテキストを使用し授業を進めているが、毎年少しずつの分量が増え、結果、テキストについて何の説明等もしないまま授業が終えてしまうことが続いていた。
- ・平成 27 年度では、用意したテキストはきちんと説明することに心掛け、その内容も基本に絞るものとしたため、時間内にその内容も伝えられことから、当初の目論見は達成できたと思料するが、その分、更生保護に関心の高い学生からすれば、やや物足りなさを感じたかもしれない。
- ・今後は、テキストの履行後において、シラバスで示した参考図書も読んでみたくなるような授業内容に工夫したい。

2 授業についての自己評価後の改善・工夫

- ・授業では、本制度の考え方や、新聞やテレビで報道された事件や事故についての意見を求めてきたが、普段の関心事でもないことから、今一つ授業の取り組み姿勢に積極性が見られなかったことから、本年度では、学生の同年代の者が関わった事件等を集めて題材とし、授業を進めていくこととする。

非常勤講師 氏名:原川洋子
対象科目:介護レクリエーションⅡ

授業では、音楽を活用したレクリエーションを企画し、グループワークを実施する上で、福祉施設利用者が楽しく活動に参加する為の援助や工夫を学生が主体的に考えることが出来ることを目標としました。

具体的には、① 学生自身が音楽活動を楽しめる。② 利用者の馴染みの音楽を知る。③ 音楽レクリエーションに適した楽器の扱いや活用を知る。④ グループ活動を企画・実施する。です。

その為の工夫として、福祉施設利用者の馴染みの曲だけでなく幅広い年代で楽しめる選曲と個々の曲に適した活動(歌唱活動・楽器活動・軽体操等)をとりあげ、音楽活動を学生自身も楽しめるようワークを行いました。楽器活動では簡易打楽器、ハンドベル、トーンチャイムなどの演奏を通して、五線譜を使用しない活用法も紹介しました。また、グループワークの企画・実施では、ロールプレイで実施者役だけでなく、利用者役の経験も体験するように配慮しました。

高齢者の現場で活用されている音楽(昭和の懐メロや民謡・唱歌など)は、学生にとっては馴染みがない場合が多く、知らない曲を最初から歌うのは難しいので、授業ではCDを鑑賞し曲の紹介をしました。出来れば曲を覚えて何度も歌ってみてください。また、高齢者の馴染みの曲だけでなく、ラテン音楽やクラシック音楽、最近流行りの曲等うまく活用すれば、様々なタイプの利用者の方と幅広く楽しむことが可能です。

そして、高齢者と一緒に歌唱活動や楽器活動を楽しむためには、曲を覚えるだけでなく、利用者に対する声掛けや参加意欲を引き出すアプローチが重要です。授業で参考になったこと、知識として覚えたことを現場で応用できるように、今後も経験を重ねて臨機応変にアプローチしてください。利用者と共に楽しめる活動へ体験を通して学んだことを生かしましょう。

学科：一般教育等 職名：非常勤講師 氏名：原田茂治

対象科目：情報処理演習（演習）、情報の活用（演習）

I 授業の目的・目標など

情報処理演習：基礎的な情報リテラシー（ワープロ・表計算・プレゼンテーション・e-mail）を身につけて、大学での勉学や、職業および市民生活に役立てること。

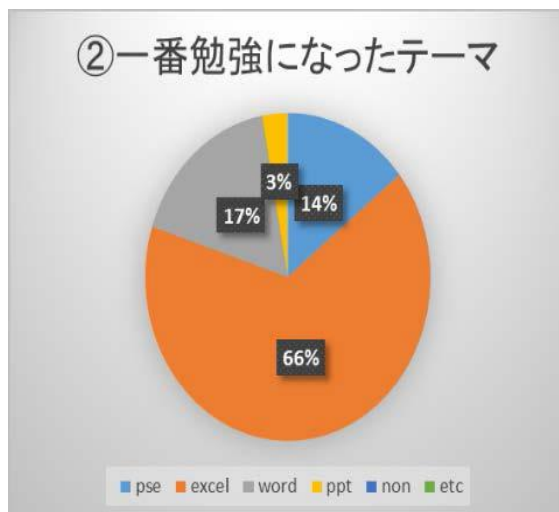
情報の活用（原田担当分）：マニュアル検索から機械検索への流れを知った上で、Internet上で成書、雑誌、新聞および論文の検索や、JDreamⅢなどのデータベースの検索を行えるようになること。

II 授業の自己点検・自己評価

「情報処理演習」

情報リテラシーの基礎（県大ネットワークと情報処理教室の使い方、E-mail, MS Word, Excel, PowerPoint, Adobe Photoshop Elements）を学ぶだけの演習であるが、毎年これが意外と好評なのである。

学内で写真撮影をして、それをプリントラボレベルに仕上げることを、従来と同様に演習の一環として行った。今年度は写真の階調を整える程度のレタッチを実習したせいか、授業アンケートで写真制作が一番面白かったと答えた学生が90%を越える状態であった。一番勉強になったテーマは圧倒的にExcelであった。作表、作図はもちろんのこと、簡易データベース、関数、統計入門（標準偏差と相関係数）を取り扱ったので、高校のレベルを超えたということで勉強になったのであろう。Word 既習の学生にとっては繰り返しの学習となり（③つまらなかった19%）、未修学生には②一番勉強になった（17%）のであろう。PowerPointには2回しか時間が割けなかったので、あまり良い評価を得ていないようだ。図中のnonはテーマ未記入を表す。





Word に多くの時間を割くことを見直すときがきているようである。授業評価の平均点は、学科専攻の平均並みなので特に評価はしない。

「情報の活用」

主として利用したデータベースは NDL-OPAC, CiNii, 聞蔵Ⅱ ビジュアル (朝日新聞データベース), JDreamⅢ の JMEDPlus ファイルである。卒論に悩んでもいない受講学生にとって、情報検索は差し迫った課題ではないであろうし、4 回の講義演習に多くのことを伝えているので、消化不良になっているかも知れない。しかしそれはそれで良いと思う。

非常勤講師 氏名：藤原愛子
対象科目：災害時歯科保健(講義)

少人数の学生への講義であり、学生と言葉を交換するような講義展開が可能であった。
学生からは、話ができたと、体験した内容を織り交ぜた講義であったことに対して、評価を得た。

平成28年熊本地震の被災県居住者として被災者支援を体験したことからは、とりわけ傾聴について意義の深さを認識した。今年度は、これらの理解できたことについても織り交ぜて、被災者対応に生かせるように伝えたい。

平成 27 年度 FD 委員会

委員長

鶴橋俊宏

委員

野嶋秀子(一般教育等)

鈴木琴江(看護学科)

中野恵美子(歯科衛生学科)

山本学(社会福祉学科)